328
378

コ1267

328-378

御製集

第六卷

昭15.1.25
購求

例言

本卷には後柏原院御百首部類、同院詠百首和歌、後奈良院御製集、同院御百首、正親町院御百首の五種の御集を收載し、これに添ふるに、本會にて謹撰せる後柏原院御集拾遺、後奈良院御集拾遺、正親町天皇御製の三種を以てせり。

後柏原院御百首部類は明應、文龜、永正、大永の數十年間によませ給へる御百首和歌十種より、詠五十首和歌、詠三十首和歌等の御詠草にいたる、約千二百首の御製を輯錄せる御集にして、版本柏玉集第九第十の兩卷に收めたる五百首和歌は勿論、柏遊冷三百首(御製百首、遊遙院實隆百首、冷泉政爲百首)金花集(文龜三年の御製百首に實隆の百首詠を添へたるもの)等に收めたる御製亦悉くこれに載せたり。本集の圖書寮に藏するもの二本あり。一は後柏原院御百首部類と題し、一は單に後柏原院御百首とのみ題す。本書は專ら此二本に據り、かたはら、柏玉集、御點取部類、金花集、柏遊冷三百首等の古寫本を參照せり。

後柏原院詠百首和歌は御百首部類には載せざれども、其奥に「右後柏原院御製

也。御自筆之一卷有之」として、御點取部類中に收めたれば、御製なること疑なし。同院御集拾遺には、文明十四年九月二十八日詩歌合、文龜三年六月十四日三十六番歌合、永正二年二月二十二日水無瀬御法樂、大永二年八月四日御會戀五十首の類數百首を謹輯せり。

後奈良院御製集は永正七年より天文の末葉にいたる四十餘年間の御月次、御法樂、公宴、續歌等五百有餘首を收め、なほ卷末に年代不詳の御製二百首を載せたり。本集は圖書寮本以外に類本なし。同院御百首亦寮本に據る。同院御製集拾遺には享祿二年五月二十日春日社法樂百首、天文十一年二月大神宮法樂千首和歌の類百十餘首を採錄せり。

正親町天皇の御製は世に傳ふるもの稀にして、御百首以外には、僅に三條大納言實世點の天正六年十月八日の御製數首と、案樂行幸記に見えたる二首の御製とを摭ひ得たるのみ。同院御百首また寮本に據る。

大正五年正月上旬

古谷知新謹識

御製集第六卷目錄

後柏原院御百首部類……一—二〇〇
御著到百首永正十年……一
御百首……一七
御百首……三四
御百首明應二年……五一
御百首……六三
御百首……八〇
御百首……九七
御著到百首永正六年……一一三
御百首文龜三年……一三〇
百首和歌文龜三年……一四七
詠五十首和歌……一六四

詠三十首和歌……一七〇
詠三十首和歌明應五年……一七五
詠三十首和歌大永四年……一八〇
雜二十首……一八五
十二首……一八八
十首……一九〇
十首……一九六
六首……一九七
後柏原院詠百首和歌……二〇一
後柏原院御集拾遺……二一九
後奈良院御製集……二八七——二四〇八
永正七年御製……二八七
永正八年御製……二八七
永正九年御製……二九〇

永正十年御製……二九五
永正十一年御製……二九八
永正十二年御製……三〇三
永正十四年御製……三〇七
永正十五年御製……三一三
永正十六年御製……三一五
永正十七年御製……三一九
永正十八年御製……三二五
大永元年御製……三二八
大永二年御製……三三一
大永六年御製……三三一
大永七年御製……三三四
大永八年御製……三三五
享祿元年御製……三四一
享祿三年御製……三四四

享祿四年御製……三五一
天文元年御製……三五九
天文三年御製……三六一
天文八年御製……三六七
天文十年御製……三七一
天文十二年御製……三七四
年記不知御製……三七五
後奈良院御百首……四〇九
後奈良院御製集拾遺……四一五
正親町天皇御製……四三三
正親町院御百首……四四五

御製集第六巻目錄終

御製集　第六巻

後柏原院御百首部類

御著到百首　永正十年

初　春三月三日

あら玉の春の光もいくめぐりそらに月日のためしをぞ知る

霞四日

あさなあさな春の霞の奥はありと都に見るもふかきやまかな

霞五日

御百首部類

白浪の花ともいはじ伊勢の海や霞むみるめを家づとにせむ

鶯 六日

呉竹の夜床ならべてほのぼのとあくる夢路にうぐひすの鳴く

春 雪 七日

下折のこゑをも聞きし陰ながら松の葉かろき春(レイ)のあわゆき

若 菜 八日

春をへて野守のかがみかげ見れば知らぬ翁も若菜摘むらし(ちゐイ)

梅九日

梅の花思ふあまりに身をわけて一樹ごとにと見しもこそあれ

梅十日

小初瀬や梅のにほひは(もイ)さだかにて宿はと問へば代代の春かせ

柳十一日

河岸のやなぎの絲やみをつくしながきを深きしるしとぞ見る

春 雨十二日

野山にも(イ)も山もこのめ春雨色そはばいざ濡れつつもうちいでて見む

歸 雁十三日

はるかにも思ひこし路の春の雁かへる山をばみやこにぞ見る

花十四日

春の中の花をいく度今日明日といひしは過ぎて猶またるらむ

花十五日

色も香もおもひのほかの花をこそよもぎ葺のかげにても見め

花十六日

花を思ふ心の色はくれなゐのあくにもあらずいかに染めけむ

花十七日

みよし野の岩のかげ道花ゆゑに踏みならしても世をぞ忘るる

花十八日

山風の花やいづくにおちたぎつ殘るこずゑをみなかみにして

春　月十九日

花ちりてなごりかすめる梢をもかごとがましき月のゆ(巻の月影イ)ふかげ

藤　二十日

玉かづらたえぬものとや蔦の葉も秋みし松に(はなイ)かかる藤なみ

欵冬　二十一日

花に鳴くこころを色のちぐさにてまた山吹にうぐひすのこゑ

三月盡　二十二日

花のかげの心をしらば月も日もたつことやすき春はあらじを

卯花　二十三日

ときは木に(にもイ)たまるばかりの雪ならし青葉の山に咲ける卯の花

郭公　二十四日

見しやその(それイ)一夜のやどの郭公しのばれぬ音は誰れかまさらむ

郭公　二十五日

ほととぎすふたむら山の一聲にあやに戀しきおもひそふらむ

郭公　二十六日

五月まつみはしの花に時鳥こぞともい(はイ)はじ世世のふるごと

夏月　二十七日

やどれなほ秋はありとも夏ごろもうらなく思ふ月の夜ごろに

五月雨　二十八日

しげりそふ(あイ)端山しげ山もるつゆや晴間に見るも五月雨のそら

五月雨　二十九日

はれやらぬ空も五月の蟬のこゑ照る日よりけに雨やくるしき

螢　四月一日

飛ぶほたる山下水の音してはおのがおもひの木がくれやなき

夕立　二日

夕立はちり吹きたつる風のうへに雲をも待たずくもる空かな

納涼三日

さしぐみに思ふもすずし山水のすめるこころに夏やおくらむ

早秋四日

常磐山秋ほのめかすはつ風の(ニ)つひには色に見えむとやする

七夕五日

思ふには棚機つ女の一夜しも八千夜をねぬる秋にやはあらぬ

七夕後朝六日

七夕のかへるあしたのおもひ川きのふは淺きわた瀬なりけむ

露七日

くらべては春のかすみもふかからじ心のいろの秋のゆふつゆ

萩八日

眞萩原した葉もまたずをしと思ふ花ちる頃をいねがてにして

萩九日

吹きしをる萩の葉ならばいかにぞとかたしく袖におもふ秋風

薄十日

くるるまで人やはとまる花薄むれたつ野邊の袖のおもかげ

蟲十一日

身をしりて鳴くにもあらぬはかなさは露にかけける蟲の命よ(ヨ)

鹿十二日

秋よいかにいはほの中も今更に世のうきことを鹿ぞ鳴くなる

初雁十三日

朝霧の夜ぶかき空にたちかへりまたややどりをかりの鳴く聲

月十四日

波の上は殘るくまなき影ながら漕ぎいづる舟や月にさはらむ

月十五日

淺茅生にあまり露けき秋をへて思へば月もおきどころなき

月十六日

月のみぞすめるかげなる難波潟雲井に見ゆる山の端もなし

月十七日

しるべしていざとやいひし空の月ゆくゆく見れどあふ人もなし

月十八日

山にてもとどめぬ月の恨のみまさきのつなのよるよるのかげ

擣衣十九日

あさごろもたへてもうつや露霜に機おる蟲もあればありきと

霧二十日

山深み霧わけいでむかへるさも暮れはてけりな蜩のこゑ

紅葉二十一日

露時雨さていくしほのおきつなみ立田の山の秋をふかめて

紅葉二十二日

下もみぢそむるしづくは松杉のあゐより出でてあをき色かは

暮秋二十三日

おく露をあだにやは見む行く秋も人になごりの涙とおもはば

初冬二十四日

山里や冬ごもるらむ吹きかはるほどにもあらぬけふの嵐に

時雨二十五日

ふりおきし雲のかへしの村時雨おもへば秋もめぐりきにけり

落葉二十六日

水の上にちりやはとまる枝ながら木の葉にかけよ風のしがらみ

落葉二十七日

飛鳥川ふちは瀬にとや色かはるかつらぎ山のこがらしのあと

冬月二十八日

月なれや夕河わたりほどもなく氷をしける水のさむけさ

霰 二十九日

天の河氷や空にくだくらむあられにちらす音ぞはげしき

雪 三十日

よもぎふに雪はへだてむかげもなし朝日夕日をなに思ひけむ

雪 五月一日

夜の色はひとりわかるる雪の上にあくるやいづく峯のよこ雲

雪 二日

それと見る雪の遠嶋くるる日にしろくたつらむ波もわかれず

歳暮 三日

霜の後の松ならなくに年くれてまたあらはるる老のかずかな

初戀 四日

ものぞ思ふ月のはつよのはつかなる面影したふ雲のはたでに

忍戀 五日

きえねただしのぶのみだれ限あらば露もいかなる涙とかみむ

忍戀 六日

かばかりに忍ぶは深き心とも知られむかたに知られぬもうし

不逢戀 七日

戀といふはこれぞ世の常身に限る思なりともいかにしてまし

不逢戀 八日

われにこそつれなき色の常磐山よその紅葉はいかがとぞ思ふ

不逢戀 九日

あぢきなく夢にだにとはたのまずよ夜の衣を思ひかへして

不逢戀 十日

帚木のよそめばかりは道たえて一夜ふせやのかげも知られず

不逢戀 十一日

命にぞまかせはつべき今更に思ひたえむもあさきこころを

初逢戀十二日

一たびは思ふにまくるつれなさのうきこそならひ末も頼まじ

曉別戀十三日

空音ぞといひまぎらはさむ程もなしゆふつけ鳥に鐘も聞(ちかづく)えて

後朝戀十四日

われに人うかるるたまも殘さじをこの朝露のそでのなかなる

逢不遇戀十五日

たえにける逢瀬よいかに涙川まさるみかさを袖にせきても

逢不遇戀十六日

かひなしや見し夜のままの月みても結び(はい)すてたる夢は夢にて

逢不遇戀十七日

同じ世に本の身ならぬ身のうさを(よイ)たがならはせる思なるらむ

逢不遇戀十八日

しのすすき忍ぶかたにはいつ(いひなしイ)なり(なレイ)て逢坂山にあきかせの吹く

逢不遇戀十九日

年も經ぬこの世ながらの人をしもふるき枕にしきしのびつつ

忘戀二十日

書きやりしわが一筆も殘るらむそをだにみても思ひいでてよ

忘戀二十一日

草の名はかひなきものを來(よイ)し方にかへるもあれな住吉のなみ

忘戀二十二日

慕ふ方にいふにはあらで何をかはたよりになして驚かさまし

恨戀二十三日

はかなくやわが身を頼む中にして人を恨むるふしもありけむ

曉二十四日

心にぞあかつき月はすみにける空にまよへる雲もかからず(イ)

松 二十五日

朝な夕なみちくるしほにそなれ木の松葉は波の玉藻おきつ藻

竹 二十六日

今更に生ひいづる影は若竹のおのが世世なるものとこそ見れ

山 二十七日

いく藥そらにつたへしけぶりよりよもぎか島も富士のしば山

川 二十八日

松浦川すめるやいづく海士ならば舟を家ともこたへこそせめ

橋 二十九日

行末はただに過ぎじと橋柱身をたつる道やしるしおきけむ

關 六月一日

あしがらやの(イ)ただ雲霧の八重山ぞみちなき關のとざしなりける

旅 二日

草枕かげなき野邊にあかす夜をかくて見ずばと(イ)思ふ月かな(イ)

旅 三日

心より袖にわすれむしづくかは野山の露はわけつくしても

海 路 四日

けふもまたおきつ白波すゑに(イ)見てよるのとまりと出づる舟人

山 家 五日

雲にとぢ嵐にひらく柴の戸をあるにまかせてかくれがもなし

山 家 六日

人もこそおくれじといひし山住にわれさきだちてあるじ顔なる

田 家 七日

稲葉もる庵ひとつのうちなれや鹿のおきふし雲のたちゐも

述 懷 八日

わが世をばなきになしても思ふらむ人のおもひぞ人に苦しき

述懷九日

立ちかへりうらやましきは末の世にあへるを道と思ふのみなる

懷舊十日

人ごとの昔がたりは高砂の松のひと木にいふかひもなし

夢十一日

知らずたれわれにもかして時の間に(の)五十年の枕夢は見すらむ

神祇十二日

あふげなほ月日のうへのます鏡かたちなきしも神のこころを

釋教十三日

かくて身の心にこ(のこ)ゝろえぬさかひをばいかに隔てていかに尋ねむ

祝十四日

をさめしる時世は文にやはらぐも弓にたけきも同じこころに(は)

御百首

春

山早春

去年とゆき今年とくるも逢坂のおなじ山路をさかひなるらし(ち)

子日友

花もさぞ子の日する野の松よりぞ春もてはやす友はありける

海上晩霞(遠イ)

見るが中にみちくるならし夕汐の干潟の松もかすみあひつつ

舊巣鶯

鶯はたれをすもりに殘してかこの山里を出でむとすらむ

尋若菜

遠くとも行きてや摘まむ山かげの根芹は水もふかきみどりに

松殘雪

下消の雪のしづくのこほりにも春きてさむき松のいろかな

梅香留袖

わが袖のにほひになして梅が香を花に忘るるこころあささよ

橋邊柳

波風にたへぬ柳も宇治橋のあやぶむかたになびくいろかな

幽栖春月

月も知れ霞に見るも蓬生を(イ)思ひはなれぬこころとやせむ

野春雨

あをみゆく野邊の芝生におく露はかすみし雨の名殘ともなし

春曙雁

暮ふともとまらじ雁のかへるさをまかせてや見む春の曙

花始開

春の中をまたれて過ぎし日數までかつ咲く花にをしき色かな

靜見花

見る人もあらじと花に宿りてや我れにかたらふ(イ)鳥のこゑかな

依花待人

忘れてはとはれむ身とや思はまし花をあるじの草のとざしを

花慰老

年年の花はさかりのならはしにいくたび老の身をわするらむ

落花隨風

あだにしも思はざりつる花の上を風に任せて見るがつれなさ(なき(イ))

雲雀落

春ふかき草の端山の夕ひばり落ちくるほどもそれとやは見し

水邊苗代

せくにしも苗代がきは越えつべしもときし方の水のこころは

欵冬露

山吹の花にはかなき露もなほむすびやとめぬ井手のしたおび

暮春藤

行く春をいかにうらみむ眞葛はふ野邊の藤なみ花もしをれて

夏

新樹風

わかみどり露吹きみだす朝風にきのふの花も散るとこそ見れ

里卯花

卯の花も春におくれし色と見てまたこそとはめ里のかきねを

杜郭公

郭公木ぶかき杜のひとこゑは世に忍ぶらむほどを知れとや

時鳥何方

なほざりに聞きしとや思ふ行くそらの月にまぎるる時鳥かな

池菖蒲

根をたえて今日はあやめを引く手にも殘るかひなき池の浮草

對橘問昔

にほへなほ花橘のわが身さへ代代のかずとて忍ぶむかしを

五月雨晴

さみだれは今ぞ雲間の夕日影いづるとや見むのこるとや見む

峰照射

山ふかくすむらむ鹿も影やなき峯たちならしともしするころ

庭夏草

あらはなるかげぞと見しも茂りゆく庭に道なき草のいほかな

夏月易明

今のみとほどなき影をしたふなよただ秋の日のみじか夜の月

隣蚊遣火

かやりたく煙はよその思ともうきなか垣に知られやはせぬ

螢似玉

とぶ螢おのがひかりの玉による露やいろなきあしのむらだち

遠夕立

夕立はふりくるそらの待たるやとねごし山ごし風やつぐらむ

樹陰蟬

夕付日ほのかに聞くもくるしきは木の間もりくる蟬のもろ聲

納涼忘夏

夕すずみひとり聲して行く水もいはまほしきやいまを秋ぞと

秋

浦初秋

よる波にこゑそふならし志賀の浦や松はひときの秋のはつ風

七夕別

まれにあふ星の契よ人やりのみちならなくになにわかるらむ

荻聲驚夢

見し夢もさすがにをしき手枕にまだきかずばの荻のうはかせ

萩映水

萩が花影みるよりの水の秋をいつの木の葉のいろにいづらむ

薄似袖

袖と見る尾花よなにをおもひ草あやしやそれも露こぼるらむ

雲間初雁

春の雁わかれしそらにくらぶればいきくるみちは雲霧もなし

田家鹿

もる小田の稲葉を鹿の草臥にぬる夜もあれやこゑたゆむなり

露底蟲

ここに聞くうらみや淺き野邊の露さぞおく山のまつむしの聲

故郷秋夕

わびつつも住みはてぬべき故郷にこころかへせむ秋の夕ぐれ

對山待月

待つほどを何へだつらむ月の行く空にはおよぶ山ならねども

江月冷

波風のほかにもかげぞすさまじき古江の月のみくさがくれは

月催涙

よしやその袖にもあまれながめつつ月をあはれとおもふ涙は

秋月添光

秋の月ながしてふ夜のそれもなほ思へば空のひかりとぞ見る

獨惜月

仰ぎ見む人のためにも悲しきはわが世くもれる雲のうへの月

近擣衣

衣うつわざもさこそと思ふ夜になほ身のうへを賤がこゑごゑ

霧隔舟

明石がた行くらむ舟のあともなし昔の秋やあさぎりのそら

澤畔鳴

芹つみし山田の澤にたつ鳴の羽音もまたや袖ぬらすらむ

菊久盛

何のうへにあだにか見つる秋の露つもるもいく世にほふ白菊

岡紅葉

霧に見しこずゑはわかず片岡やこのあしたこそ霜にそめけれ

暮秋紅葉

染めやらで散るとも見えぬ陰はあれど梢の秋ぞひとり程なき

冬

朝時雨

朝日影みえすく雲につれなくも夜のしぐれやなほのこるらむ

落葉有聲

たちかへる枝にはなにか木枯の音してゆくもよそのもみぢ葉

竹間霜

むらすずめ枝やすからぬ思あれや竹の霜夜をあかすやどりに

寒草處處

冬の色にいづれをか見むふみからす野邊の道芝霜のしたぐさ

湊寒蘆

みなと江の蘆の枯葉やみをつくし深きしるしの霜を見すらむ

懸樋氷

つたひきて懸樋に遠き山水はこほらぬさきに絶えむとやせし(する)

冬月冴

冬枯のこずゑの月にさえさえて風もくまなきかぎりをぞ知る

曉聞千鳥

浦づたひ鳴くや千鳥に寐覺するわれもいづくに枕さだめし(む)

河水鳥

をし鴨のちぎりもはかな河の瀨の玉藻の床になびくこころは

關路雪

まよひきてすすまぬ馬よ峯の雲せきぢの雪をいくへとか知る

雪中眺望

晴れやらぬ空にくれ(はイ)たるけふの日の影みぬ山も雪ぞさやけき

夕鷹狩

かりごろも山やかさなる飛ぶ鳥の聲もきこえぬ道に暮れぬる

炭竈煙

峯の雪あたたかげにて炭がまのけぶりにかすむ松のひとしほ

爐邊閑談

長閑にてかたらふうちや春の日のひかりにあたる埋火のもと

年欲暮

春はいさ近きは年のいそぢぞと暮るる名殘(ともくれしを名殘をイ)やひとりなげかむ

戀

忍涙戀

おもひあまる心(ハイ)のうちのしがらみを袖にかけてもせく涙かな

傳聞戀

思ひいるそこのみるめもいかにぞと聞くにゆかしき波の上かな

幾見戀

たが春にあくまでか見し山ざくら霞の間より添ふおもひかな

祈難逢戀

人ならば神もねたしやつれもなき方によるらむ心みえぬる

契經年戀

忘るらむ賴めおきてし言の葉はありしものから月日へにけり

待空戀

あは(あかイ)でしもいかに別るる道ならむ待つ夜にあくるみねの横雲

來不留戀

かへるさのこは何故といひおかば立寄る程をことわりやせむ

返書戀

いかが見し夜の衣のそれならでかへすや夢と思ふたまづさ

會不逢戀

ひとたびはわたる瀬もみし阿武隈にたが心なる霧のへだてぞ

尋在所戀

世の外のたまのありかも思ふにはそこと知邊のなきにやはあらぬ

欲顯戀

いつのまに心ゆるして關守のうち寢ぬ夜半をゆきてとふらむ

恥身戀

難波潟なにに殘れるちぎりとてあしからじとは人に見えけむ

難忘戀

面影もなさけ(なげき)もわきていつの時いつのをりとか人にしのばむ

留形見戀

かはる世の行方や人に殘るらむこれなむそれと思ふかたみに

恨絕戀

恨みわび今はたえねとおもひこしわが玉の緒を人にかけつつ

雜

寐覺鷄

いたづらにぬる夜の夢をいさめてやここになきぬる庭鳥の聲

古寺鐘

吹きのぼる谷かぜ見えて初瀨山ゆふべのかねに雲のかかれる

薄暮松風

吹きいづる風こそくもれ夕づく日さすかげよわき岡のべの松

閑中灯

風のまに消えぬと見るもつれなきやひとりの影の宿のともしび

巖頭苔

さざれ石のいはほの苔の行末はおのがみどりや松(を)にゆづらむ

葦間鶴

子をおもふ鶴の毛衣あしはらのうきをやわぶる夜のうらかぜ

澗戸雲鎖

暮れぬとて歸る雲をや主ならむおほふと見るも谷のとぼそに

樵路雨

山とほくはこぶ薪にふりくるも雨はあしときみちにおくれて

杣河筏

いかだしも宮木くだして杣河の水のひびきにやまびこのこゑ

山家送年

山住は身をやつしても身ぞやすき恥おほからむ命ながさの

羇中懷都

宿ごとのひと夜の友も過ぎこしはみなふるさとの人に戀しき

旅泊波

浦風もしづかなる夜をいかに寢てひとり袖こす波のまくらぞ

往事如夢

見もはてぬ夢のうちにてうつる世のいつを昔と驚かれけむ

述懷多

世を恨みあるは我が身をうしと思ふ人にいつかは心やすめむ

寄神祇祝言

あつめおきて見まくのほしき百種のねがひもみちぬ玉津島姫

御百首

戀歌三首闕

春

曉立春

おのづから春たつ空も知らるるやこの夜あけゆく鳥のはつ聲

溪餘寒

つもるとも春はと思ふ雪もよになほさえくらす谷のしたかげ

檜原霞

吹きわくる峯の檜原のあさがすみ晴れて嵐やまたくもるらむ

杜霞

里までとおもふもとほし見わたせばかすむ生田の杜の下みち

名所鶯

うぐひすのこゑする道にうちいでて明けくれたどる逢坂の山

若菜

うちむれて若菜つむなり都とてはやくも野邊の雪は消えねど

草漸青

むすべどもみどりそひゆく若草のねたくや春の霜はきゆらむ

里梅

春かせも人をぞわかむ問はでゆく袖には惜しきやどの梅が香

門柳

舟つなぐたよりもあるかわたしもりわが門ちかき青柳のいと(かげ)

初花

待たれつつ早くも咲かば櫻花ちらずもあれやをしみやはせぬ(む)

朝花

ひかりある花のこずゑの朝霞うつろはむとも見えぬいろかな

嶺花

見つつゆく吉野は山のおくもなし峯もふもとも花にわすれて

嶋花

人すまぬおきつ嶋にも咲く花のかげこそあるじ舟やとめまし

殘花

いざ櫻われもといはぬ身のうさもよしやしばしと花ぞ殘れる

濱春月

さすしほのみつの濱風はるばるとふけたる月ぞ浪にかすめる

湖歸雁

かりかへる志賀の浦波すゑかけて思ふもとほしみこし路の空

松藤

底きよくいろかにすめる池水やふぢ咲く松のかげを知るらむ

苗代

苗まくや鳥おふ聲もをちこちに水せきかけてかへすあら小田

折歎冬

一枝は手折りて行かむやまぶきの花はうつろふ色あさくとも

暮春

花ちりて春はかぎりとおもひしに殘る日數のくるるしもうし

夏

遲櫻

夏さくはこころありける色香かな春はなべての花とこそ見め

岸卯花

卯の花の咲ける岸かげ水もなしいかなる波のかけてゆくらむ

待郭公

忍ぶべき誰れゆゑさても郭公待つ人ごとにつれなかるらむ

海郭公

そことなき夜の舟路のほととぎす鳴く音にあけて山も見えけり

遠郭公

入る月も同じ雲間のほととぎす山のあなたの誰れをとふらむ

瞿麥

たが袖にゆるす色とも手折らましくれなゐ薄きなでしこの花

岡邊早苗

うゑわたす田の面の末は野をかけて岡邊の里に早苗とるなり

樹陰照射

照射してかへるますらを木隱のしるべばかりの月は見るらむ

五月雨

五月雨はかびやが下も水こえて雲ぞけぶりに立ちかはりたる

鵜河

かがり火のなほ遠ざかる鵜飼舟いま一瀬とやさしのぼるらむ

簷廬橘

月もなほおなじ昔ともりくるや花たちばなのかをる軒端に

旅夕立

このままにほさでやねなむ旅衣日もゆふだちの雲のしたみち

野螢

けぶりにぞたつ蚊の聲も遠ざかる野邊の螢のなにともゆらむ

納涼

踏みわけてこの里人やすずむらむしげりおくるる山のかげ草

六月祓

今年はや今日のなかばのみそぎ川わが齡ともおもはましかば

秋

早秋

うちなびく小田の早苗の一穂にも秋をみせたる今朝のはつ風

七夕別

うすくなる光もかなし七夕のわかれにちかきあけがたの空

萩風

そめてみむ色をもまたで萩が枝の下葉のつゆをはらふ秋かぜ

籬萩

萩の葉におとするほどや吹かざらむまがきあらさぬ庭の夕風

行路薄

行く人のたちもかへらず花薄しひてはなにとなほまねくらむ

田上雁

おくれけむ雲路はいづく雁のなく同じ田の面に落つる一つら

外山鹿

あはれをもうきをも知らじ牡鹿なく外山の里の秋をとはずば

原露

咲きしをる袖の秋かぜ身にしみて夕露わくる奈須のしのはら

夜蟲

ながしとも思ひわかでや蟋蟀秋の夜をしも鳴きあかすらむ

渡霧

舟よばふ里はむかひにとほからで浪間へだつる淀のかはぎり

駒迎

名にしおふ今夜のかげも望月の駒ひきこゆるあづまぢのやま

關月

浪かぜのうきねなりとも清見がた關路の月は誰れか見ざらむ

竹間月

なびきあふ竹のさ枝にもる月のかげさだまらぬ秋風ぞ吹く

浦月

こころすむ明石のうらの月にこそこの山里もとはまほしけれ

古宅月

ふりはててしげき板間の月も見つうきすまひとや人はいふらむ

浪月

雲もなき空にすめるはしづかにて波間の月やかげさわぐらむ

擣衣

うちたゆむあし屋の里のあま衣しのにをりはへ今やほすらむ

秋時雨

はれやらぬ雲はしぐれを心にて降りみ降らずみ秋さむき空

紅葉

もみぢがり時雨を袖につくすかなこころに秋の色をふかめて

九月盡

暫しともいはで別れし秋よなど行方をだにも知らせやはせぬ

冬

初冬

秋もこそ霜はおきけめ冬のきてあらはに見ゆる野邊の色かな

瀧落葉

この頃はちれるもみぢのくれなゐに染めてぞさらす布引の瀧

庭霜

霜むすぶ岩根のをざさうちそよぎ音すさまじき庭のやりみづ

柴霰

袖さむみ眞柴をひろふ山がつは玉とて(ママ)ちらでしくあられかな

嶺雪

大比枝や横川のみねをさしてこそうらこぐ舟も雪は見つらめ

杉雪

人とはぬしるしなりけり山ざとの雪にあとなき杉のしたみち

杜雪

さそひくる雪は梢につもりけり紅葉はちりし木がらしの杜

枯葦

あま人やこれもつま木と求めけむ霜の枯葉のあし火たくかげ

柚寒月

中たえて月もかひなし柚川のこほりのうへをくだすいかだし

磯千鳥

ともなひてたつや磯邊の小夜千鳥波のうきねを同じこころに

冬暁

さびしさに鳥の空音もかこつまで猶あけやらぬ冬の夜ながさ

河氷

こすしほの下にこほれるみなと川水をへだてて波やゆくらむ

鷹狩

とだちする尾上のとほみ聲たてて駒をはやむる野邊のかり人

澤水鳥

何をそのおもふこととて澤水にうかべる鳥のこゑかはすらむ

歳暮

つもりては老となりぬる哀をも知らでや年のくれてゆくらむ

戀

不逢戀

契ただはかなからじとつれなくば思ひしるまで身をや盡さむ

切戀

をしと思ふ命もかろしなにを身のくるしき戀と人にしらせむ

遠戀

はるばるとわけこし道のわりなさも思ひしらずば宇治の里人

近戀

たち馴れてつらきけしきを見るもうし戀しくてこそ思ひ暮さめ

別戀

逢はざらばかかる別もなからまし戀ぞむくいのただぢなりける

負戀

わが爲にこはたの里の馬もがな人のかち路におくるるもうき

逢夢戀

思寐にかならずかよふ夢もなし人やゆるして逢ふと見つらむ

後朝戀

知らずなほ露の命の殘るかなおもひ消えにしきぬぎぬのあと

聞戀

聞くのみはあやめもわかずあやめ草ねたくも人にひく心かな

久戀

あかざりしおもかげとめて夕顏の露わすれずもぬるる袖かな

白地戀

あふごとになさばさもこそ有明のあかつきいでて見る程もなし

恨戀

何とかくなげの情もなかるらむうらみは人のあはぬのみかは

絶戀

立ち歸りまた渡らむもいさや河たれせきとめて逢瀨たえけむ

契戀

かはるなと幾度人に契るらむ身のゆくすゑはわれも知らじを

祈戀

こひせじのみそぎを神のうけざらば思ふすぢをや猶祈らまし

偽戀

笛の音によるゆく鹿もいつはりのある世かなしき物思ふらむ

變戀

あらずなる人のこころに草も木も霜おきてこそ色かはりぬれ

雜

寄衣雜

うき寐するたみのの島のあま衣ぬれずばかかる月を見ましや

寄枕雜

友なくてひとりぬる夜の手枕はあけぬものとや思ひのどめむ

寄花雜

花ならぬ心のうへにかげみてば咲ける草木もいろやなからむ

寄市雜

市人のかへりすみぬるしかま川たちくる浪やなほさわぐらむ

寄舟雜

いかにこしよるの舟路ぞ浪風のなごりは今朝も猶ぞはげしき

寄橋雜

名ばかりは長柄の橋ものこる世にわが身ふりぬる類もぞなき

寄鐘雜

鐘の聲にわけこし峯を見わたせばわが跡とめて月はいでけり

寄木雜

秋ごとに草のかづらの朽ちぬるもあはれいく世の霜の松が枝

寄苔雜

朽ちのこる苔の埋木あはれまたいつをしのぶの草も生ひけむ

寄水雜

あだにちる露ともいかで石清水むすぶ手ごとに千世を數へて

以勅筆卷物御本寫書之校了

御百首

明應二年三月三日御著到
百首中二十九首闕

早春

今朝はまだ草木も知らぬ春のいろを空の緑にはじめてぞ見る

憐霞

くれなゐの名にたつよりや心をも春のかすみの花にそめけむ

聞鶯

聞かずやは枝のうぐひす鳴く聲やわが言の葉の花もありとは

子日

今日ごとの松の子の日や世をいはふ心を種に生ひはじめけむ

若菜

春さむみ袖のみぬれてたまらぬやかたみに汲める水の深芹

殘雪

踏みわくる跡さだかにて陽炎のおのれと消えぬ雪間をぞ見る

餘寒

山川や春の淺瀬はふるとしにかへらぬ水もまたこほるかな

春月

野も山も霞めるうちに影見えて待ち出づるきはぞ月はさやけき

春曙

おなじくば夜ぶかき空にながめばや名殘程なき春のあけぼの

岡梅

岡の邊やたれうゑおきて梅の花山かせながらにほひそめけむ

歸雁

さだかなる山のこなたを行く程もおのれかすめる春の雁がね

春雨

誰がつつむ涙ならじを春の雨かすみのそでにもるとしもなき

遠柳

水のいろはさやかに見えて一むらの柳に暮るるをちの川づら

春草

春はまづこてふばかりのやどりにて蟲の音とほき草の原かな

山花

色も香もうつりにけりな山ざくらあらしになびくみねの白雲

杜花

春に咲く花よりほかのこずゑをば何にこぶかき杜となしけむ

水花

名にたちてはやくも散りぬ吉野川水のこころを花にうつして

欵冬

うつろふと今朝見し露もいろになほゆふばえ惜しき庭の山吹

路藤

立ちよりて見る人やなき咲く藤の下にかくるる道ぞつゆけき

暮春

昨日より今日は殘らぬ花にこそおもかげ見えて春もくれけれ

更衣

（御製網）

卯花

卯の花のかきほに見えて草の名のなほとこなつに殘る雪かな

葵（イ）神祭

まつりする今日を待ちえて神山やかみのこころをとる葵かな

郭公

たちばなに鳴けほととぎす花鳥のあかぬ色音の春をのこして

菖蒲

我が宿のつまと見るにぞ長き根のあやめに深き戀路をもしる

夏雨

みねの庵ふもとの里の五月雨に雲のはれまはかぎりやはある

夏夜

閨のうちは夜がれがちにて夏はただ枕もとらぬ夢にあかしつ

鵜河

おほゐ河鵜船やくだす夕づく夜をぐらの山のかげもたどらで

蚊火

夏蟲のひとつおもひやこれならむけぶりにたえぬ宿の蚊遣は

夏草

しげりあひて野となる庭の草の下に思ふもさぞな秋の露けさ

叢螢

露のぼるひかりも見えて暮るる野の草の葉たかく飛ぶ螢かな

氷室

ひむろもるかげもみどりの松がせきつれなき色を雪に殘して

夕立

過ぎにけり五月の空のはれまなき名殘もとめぬ夕立のあめ

納涼

袖に吹くほどはなけれどわづかなる梢に見るも風ぞすずしき

夏祓

おのづから麻の末葉にかげそへて夕浪きよくみそぎすずしも

立秋

明けぬまの空に通ひしまくらより知る人もなき秋のはつかぜ

七夕

（御製闕）

荻風

いつも聞く松のひびきにうづもれて軒端の荻は秋かぜもなし

對荻

おもふにはわれもおとらじ花の中に荻を秋といふ心くらべは

女郎花

女郎花そでのかざしは名のみにて花のすがたぞ人にまぎれぬ

原蘭

ことぐさにかへても見ばや藤袴にほひばかりのふかき野原を

薄滋

夏草のおなじふかさをいつのまにひとむらすすき秋風ぞ吹く

悲露

いかにしてしばしも見まし秋の風うれへ顔なる草の上のつゆ

霧深

見るままに降るとも見えで霧の中は音せぬ雨の暮るる空かな

秋夕

われさへに心なくてはいかならむゆふべの雲の秋のあはれを

庭蟲

いろいろの蟲の音きかば秋きての庭を草葉にやつしても見む

野鹿

このごろを秋とはいへど踏みからす草を冬野に鹿や鳴くらむ

初雁

手にとらぬ誰が玉章ぞ秋のかり空にも鳥のあとは見えても

待月

（御製闕）

逢戀

おもひねに見しはものかは新枕いまをまことの夢のうちかな

別戀

人ぞなほこころも知らぬ鳥がねに涙くらべてあかぬわかれを

久戀

草の名はかけてもいはじ住の江のまつとばかりに年は經ぬとも

絶戀

今更におどろかしてもおなじ身のながらへけりと人は思はじ

恨戀

いかにして恨むるほどの言の葉も心のままにつたへやるべき

朝戀

朝ごとの鏡のかげもくもれただはらはぬ床のちりのまがひに

晝戀

思ふ程もさてぞ見るべき袖の露ひるますごさでとふ人もがな

夕戀

戀しさの似るときもなき夕ぐれの空をばわきて思ひやらなむ

夜戀

わりなしや一夜のうちもいくたびのまた寢にたのむ夢の契は

暁戀

知るらめや曉月のそれだにもなごりおもはで見し夜やはある

岡松

これぞこのときはの里か松のかきまつをとぼそのの岡の邊の宿

岸竹

竹なびく岸の下水おのづから千尋あるかげやそこに見ゆらむ

峽猿

吹きのぼる風も聲して山あひのこずゑを高みましら鳴くなり

林鳥

鳥鳴くはやしがくれの入日かげのこるもくるる色に見えつつ

浦鶴

波のよる入江の田鶴も聲そへて鳴く音をしまぬ浦かせぞ吹く

淵龜

底ふかき淵にかくれて住む龜は知らず浮木にいつか逢はまし

瀨魚

なにかそのたのしみならむ早き瀨のしづかにもなき魚の心は

磯浪

朝な夕な玉藻おきつ藻よるなみの磯立ちならし蟹や刈るらむ

沼水

かげ茂きまこもがくれの沼水はみぎはまされる程も知られじ

巖苔

生ひのぼるいはほの上にむす苔のおのが緣もこだかくや見む

山家

遁れきてちりのほかなる山にては何をあらしの又はらふらむ

野亭

あれゆかむけぢめもあらじ草の戸は同じ野中の道に見えつつ

海村

ひまもなく網かけほして夕日影蜑のすみかぞよそにまぎれぬ

水郷

眞柴とる舟のゆききは宇治橋のあはれ絶間も見えぬわざかな

關屋

逢坂や關の戸ささでしづかなるときを告げたる鳥のこゑかな

御百首

春

立春

いつ見るもかすむ色なる遠山はめづらしげなき春やたつらむ

海邊霞

おきつ風ふきにけらしな行く舟のかすみをいづる春のうなゐ原

春雪

春もなほふりそふ雪の初花やひとへにあらぬ色に見ゆらむ

竹鶯

竹の葉の霜雪さむみうぐひすの鳴くやなみだも猶こほるらむ

野若菜

子の日せし野原の若菜けふはまだ摘む程もなき二葉なりけり

梅風

梅の花いく木をわかずさそひきて風のあはする匂なるらむ

柳露

さまざまにあかずぞ見つる青柳の露のみだれも風のすがたも

春雨

降るとなき春の雨をも草の庵のしづかなるにや音を聞くらむ

春月

暮るるよりかすみへだてて山鳥の尾上はるかにいづる月かな

歸雁

雪のこるこしの白嶺にゆくかりの霞まぬ道もなほまよふらむ

禁中花

立ちまがふ色にはあらで雲の上や花のところをわきて見すらむ

山花

八重一重かさなる花の色よりや山のかすみもむもれゆくらむ

庭上落花

ひとり散る恨ぞふかき山かせもかき根のうちの花は知らじを

里欵冬

この里の春はすぐとも山城のとはにもみる(みぼイ)や井手のやまぶき

池藤

春はまた藤なみかけておのづから池のこころも花によすらむ

夏

卯花似月

空に知らぬひかりをみせて夕月夜おぼつかなしや庭の卯の花

卯月郭公

おのが音にあはれをそへて時鳥はるにおくれし花やとふらむ

雲間郭公

ほととぎす都をたびの空ならば雲よりほかにやどりかさばや

河五月雨

ふりつみし雪げにまさる水よりも山河ふかしさみだれのころ

野夏草

鹿の音をきかぬばかりぞ露ふかき野は夏ぐさの花もまじりて

沼螢

心ありてとぶや螢も沼水のにごりにしまぬひかり見すらむ

夏曉月

夏はただみぬ夢の間にあくる夜の月をおどろく鐘のおとかな

夕立

この里にふるがうちにも夕立はよその晴間をみするそらかな

水邊納涼

夕日影そこまでみゆる山川の淺瀨すずしき水のいろかな

杜蟬

秋ちかき杜の木の葉の下ぞめにしぐれをいそぐ蟬のこゑかな

秋

初秋朝

今朝はまだ桐の一葉もつれなくて露吹きちらす庭のあきかぜ

七夕

淵は瀨にかはる世やなき天の河たなばたつめの深きちぎりは

野萩露

ことぐさの花にやどすな秋の野の露は眞萩のうへにこそみめ

庭萩風

庭の露もはらふ音してとふ人のかごとがましき荻のうはかぜ

夜鹿

秋をうらみ妻をしたひて鳴く鹿のよるの思ぞよそにかなしき

夕蟲

夏蟲の光にはあらできりぎりす夕かげいそぐころぞほのめく

霧中初雁

天つかり霧のまがきの山こえてやどりもとむる夕ぐれのこゑ

山月

さやけさは雪にかはらで秋のつき山はかがみの影をみすらむ

浦月

ほどもなき浦の苫屋にもる月のひかりもかはる波のうへかな

水郷月

名にしおはば秋のかつらの里人や月のみやこにすむ心地せむ

聞擣衣

衣うつをちかた人の夜寒までわがたまくらに侘びつつぞぬる

栽菊

おのづから菊をもうゑてつくりなす庭の山路の秋ふかきいろ

秋霜

月いりて霜にふけゆく秋の夜は鐘のひびきぞひとりさやけき

松間紅葉

松にそふもみぢの色や秋ふかき霜ののちまでのこしても見む

暮秋

けふのみと思はぬ秋の夕さへただおほかたにながめやはせし

冬

寐覺時雨

過ぎやすき時雨もおなじ夢の間に寐覺おどろく袖ぞつゆけき

谷落葉

谷ふかみ風の木の葉の行末をまたことかたにさそふ水かな

枯野

みし秋の野はふゆがれの後までも尾花や霜のいろにのこらむ

冬月

手にむすぶ水にはあらで影やどる袖のこほりのさむき月かな

豐明節會

山藍のそでは霜夜の月までもとよのあかりのひかりとぞなる

湖千鳥

しほならぬ海吹く風になきたちて波にくもるや千鳥なるらむ

田氷

冬の田のこほりのひまのたえだえにもる聲殘す水ぞさびしき

雪散風

晴るるまもおのが枝よりちる雪や風のやどりの松を見すらむ

雪朝

降り出でて積るもうすき今朝はまづ雪間みせたる冬の宿かな

歲暮

よしさらばとまらぬ年の暮ごとに日數のこりてくる春もがな

戀

寄月戀

今よりは空ゆく月をちぎりてや戀しきときのおもかげに見む

寄雲戀

いつはりと見ても知りてもなぐさむや人の心の花のしらくも

寄風戀

聞かじただとはぬ夕のおとづれは風も秋なるあはれそひつつ(いろにこそ みけ イ)

寄雨戀

さはるとて又やこざらむ我が宿の雨にたちよる人はありとも

寄露戀

消えやすきものともみえず袖の露つれなき色を人やとがめむ

寄山戀

年へても同じこころのつれなさやときはの山の岩木なるらむ

寄海戀

朝夕に見てもたのまじわたつ海のしほのみちひにかはる心は

寄池戀

影とめてふかきなさけを尋ねみむ月だにやどる池のこころに

寄杜戀

たのまれぬ心のいろよ誰がかたにかねてうつろふ森の下つゆ

寄河戀

戀せじのためしありともみそぎ川いく瀬逢瀬をわれは祈らむ

寄木戀

かくてのみ年ふる中はうつぼ木のもとの根ざしもうき契かな

寄草戀

はかなしやなびくほどなき若草の二葉にちぎる心ながさは

寄水戀

あふさかや關の清水もわれのみは渡れどぬれぬ袖としもなし

寄石戀

吹上の眞砂をみても思ひしれそれさへなびくためしある世を

寄火戀

丈夫が鹿まつ火影たえだえに明けやすき夜ぞ逢ふかひもなき

寄玉戀

玉ならばよるの光も見ゆべきにまくらの下もなみだゆるすな

寄衣戀

かひなしや我が身にならす小夜衣うらみばかりを人に重ねて

寄絲戀

別路のこころぼそさもかた絲のあはぬにまさるものは思はじ

寄鏡戀

はかなくも鏡のかげになぐさめて物思ふ身のたぐひとぞ見る

寄舟戀

思ふ方の風まつ舟のつなで繩こころもとけぬほどぞくるしき

寄屋戀

袖はいつほすまもあらむ難波人あし火たくやも浪はかけけり

寄門戀

わりなくも門より入らぬ忍路はよひよひごとの關守もなし

寄戸戀

とはれじと思ひとぢむる槇の戸にけしきばかりの月をだに見ず

寄墻戀

いかにせむ戀もなべての數ならぬ垣根の内のへだてある身を

寄庭戀

歎きあまり庭にいでても待つ暮の今日もむなしき空や恨みむ

雜

曉雞

夜や殘るよそは告げつる鳥の音もきこえぬ山のあかつきの空

夜燈

小夜ふかみかかげつくさぬ燈のみじかき影ぞのこるほどなき

簷松

おのづから軒のいたまやかくすらむ枝さしおほふ松の落葉に

窓竹

雪のうちすずしきかげを思ふにも夏冬あかぬまどのくれたけ

嶺雲

みねたかみ色こき雲の一むらに入日は見えてかげはのこらず

瀧水

落ちたぎつながれぞたえぬ奥山の木木のしづくを水上にして

杣木

たれもこのためしにならへ杣木とる山にも深き道もとむなり

澗草

うつりゆく日影は見えず露霜のひるまも知らぬ谷のしたぐさ

磯浪

こころある蜑のすさみや一筆のゑじまが磯のなみのあけぼの

山家嵐

吹くあらしうき世のほかの花紅葉とまらぬ色ぞ友と見るべき

山家杉

陰くらき杉を軒端のやまざとやうつる月日も知らですむらむ

山家苔

苔のむすためしを知りてさざれ石の巖が中に誰が世へぬらむ

山家夢

しづかなる深山の窓のふかき夜もこころにさます夢ぞみじかき

山家煙

一とほりよこぎる雲や山ざとに風の吹きしくけぶりなるらむ

羇中山

かへりみる都のそらになぐさみてなほ山たかくのぼる道かな

羇中野

いづくにかやどりはからむ高島やけふもかち野の道の苦しき

羇中關

知るよりも知らぬ人にや逢坂の關路こゆればみやこへだてて

羇中浦

故郷のたよりもあらば浪かせに浦づたひゆく道をつげばや

羇中泊

しをれゆく浪なれ衣かへしてもよるのとまりに夢をやは見む

祝

松の千年竹の千尋の陰にだにひさしき世世はかぎりあらめや

伊勢

みがきなす玉垣よりもこの神のかやが軒端やわきて見ゆらむ

石清水

名にたかき神のひかりも石清水もなかの秋のつきに見ゆらし

賀茂

九重の雲のうへにぞあらはれむわけいかづちの神のしるしは

春日

すがの根にまづあらはれぬ春日山松に千歳のながきためしは

日吉

法の門もまもらむ道と大比叡やここにも三輪の神はこのかみ

以後柏原院宸筆書寫之校了

御百首

春

都鄙立春

やすみしる心のみちに來る春をまづ民の戸のことぶきにせむ

子日催興

今日をまづ散らすは花の例かな小松ひく野に千世もへぬべし

連峯朝霞

おそくとく春しる山も今朝みえてかすみをわくる峯のしら雪

竹亭聞鶯

うぐひすの羽風もいはじ聲のうちに朝霜はらふ窓のくれたけ

深溪餘寒

炭やきし道さへたえて谷の戸は春のあらしにふゆごもりつつ

水郷若菜

つみたむる若菜にそふや生田がは水のみどりも森のみどりも

寒覺梅風

おほかたの春の色香をおもひねの夢路はあさし梅のしたかぜ

遠浦春曙

たちかへり二見のうらの夕月夜いまをひかりの春のあけぼの

幽栖春雨

ところえて霞もとづる八重葎こころも晴(ハレイ)れぬあめぞさびしき

月前歸雁

名殘思ふ雁の鳴く音もさだかにて見送る月のかすまぬもうし

樵路早蕨

かきわくる木のした蕨をりそへて眞柴つゆけき道やくるしき

垂柳藏橋

青柳のかげもふりゆく橋のうへに苔のみだれて春かせぞ吹く

對花恥老

われぞうき散るもさかりの色香にて花の上には老やなからむ

花落客稀

散りぬれば都のやどのかひもなしまして深山の花のなごりよ

晴天遊絲

もえいづる草にもあらぬ絲ゆふのただ春の日の空をいろなる

雲雀消霞

繪にかける鳥とや空に夕ひばりおなじところにかすむ聲かな

雨後苗代

やまもとの苗代いそぐ雨すぎて日かげに見ゆる春のさとびと

瀧下藤花

かげたかき藤のしなひも瀧のいとのみだれてをしき春の山風

欺冬露繁

花の外にこぼれいでても山吹のしげみの露のにほふいろかな

惜春非一

有明の春のひかりをのこしても木ぶかき花をいづくにか見む

夏

山家更衣

ひとたびは苔にも袖をかへつらむなに山ずみの夏もわくべき

卯花作墻

おもかげは雪になびかぬ色もなし卯の花がきね竹のしたかせ

夢中郭公

ほととぎす夢なりけりと空の雲たなびくいろにのこる聲かな

盧橘薫枕

夏の夜は花たちばなの匂ふよりまくらさだめぬ端居をやせむ

古池菖蒲

茂りあふあやめ引く手に見えそめて隙ある池の水のすずしさ

薄暮早苗

うちなびき色こき雲の秋もいさみどりのなへのつゆの夕かせ

舟五月雨

波の上はかぎりあるべき舟路にも山の端しらぬ五月雨のころ

荒砌瞿麥

露深くかかれとてしも撫子の花をばさしも植ゑずやありけむ

連夜鵜河

みしやその弓張月のしもつ瀬にいまいく夜とか鵜舟さすらむ

照射欲明

ともしする尾上の火影のこる夜にめぐらぬ星や空に見ゆらむ

螢照水草

水くらき蘆間がくれにまづ見えて夜のほたるも暮ごとのかげ

隣蚊遣火

いまぞうき吹きかふ風になびきてよその煙を宿のかやり火

遠村夕立

山風にたがさとめぐるほどならししぐれて晴るる夕立のそら

樹陰納涼

知る知らず夏の日ぐらしあと見えて草を冬野の杜のしたかせ

瀨荒和祓

吉野河としの早瀨のいくとせかふるさと人もみそぎしつらむ

秋

初秋朝露

初風も吹きあへぬほどの朝露にそめぬ一葉のもろきいろかな

霧織女衣

きぬぎぬのうき瀬よいかに天の河夜深き霧のたちかさねても

荻風似雨

夕月夜いぶせさそふる雨の音にたちいでて見れば荻の上かぜ

萩花移水

おのづからをしとしも見じ萩の露おちても水の色にながれば

薄妨往反

しのすすき逢坂山も道たえて誰がこころにかみだれそふらむ

草花色色

秋の野の花に吹きいづる風の色をなにの匂にさだめてか見む

槿一日榮

あだなりとみる朝がほをそらめにて一日一日とおくる花かな

霧隔山寺

照る月をみし世へだててさらしなや峯なる寺も秋ぎりのそら

田上稲妻

いそのかみふるのわさ田の露の上に穂にいでけりな稲妻の影

旅店聞蟲

あけばまたふりすてがたき名殘あれや一夜のやどの鈴蟲の聲

雲端初雁

來る雁のつばさにかけてゆく雲は心なくてもやまやいでけむ

羇中遠鹿

草まくら露けくなりぬ牡鹿なく峯のあらしをおもひやりても

月前幽情

草の戸にみるらむ影をおもふのみ玉のうてなの月のくまなる

老後惜月

積りてはかくこそありけれ夜な夜なの月も老いぬる有明の空

老となる影をぞ思ふかたぶくを惜しとのみ見し月にのこりて(イ)

水邊秋夕

目の前に行きてはかへるわた瀬にも舟出かなしき秋の夕ぐれ(ゆふなみ)(イ)

故郷野分

あらしつる野分のあとの村雨にやがてしづくも絶えぬ宿かな

擣衣到曉

秋の夜の寐覺(に)もまたでから衣うちおどろかすこころみじかさ

對菊延齡

秋のきく花のひかりに星の名の老いぬる人のうへにこそ見め

紅葉勝花

からにしき木の葉の色の深み草さこそまだ見ぬ花はありとも

鐘聲送秋

行く秋に舟もくるまもなにならで鐘ははるかにおくる聲かな

冬

枕上時雨

初時雨まだ身にしらぬさよまくら秋と吹く風も夢にうつりて

落葉深窓

色こきは木の葉も窓のひかりにて思はぬえだの雪ぞつもれる

寒樹交松

秋の色(に)も今あらはれて木がらしのこずゑを(え)松の下葉にぞ見る

冬草纔殘

ふゆがれ(かれてたつ)の柳にさ(も)むしわが門のひとむらすすき風は見えねど

禁庭夕霜

誰が爲と(の)衛士の焚く火の影も見む夕霜ふせぐわざにはあらねど

氷閉細流

海河にいとはぬ水のこころをもこほりや中にへだて行くらむ

くだくるもむせぶも同じ石間行く音にかくれぬ夜のやま水(イ)

旅泊千鳥

なみまくら今はなかでも友千鳥しばしうちぬる夢も見せなむ

水鳥知主

わが袖のほかにやは見む水鳥のはねうちかはす池のこころを

霰音破夢

ひととほり霰ちりくるさよ風をなどか夢路にすぐさざりけむ

連日鷹狩

心ひく道はゆづるのたえじとや今日の狩場を明日もちぎらむ

雪中遠望

大比叡やさながらここに九重のかさねあげてもむかふ雪かな

驛路凌雪

わけきつる心もしのにしのづかのむまやづたひぞ雪の奥なる

冬夜難曙

聞ふかきふすまの下にへだてや音せし鐘を(も)(イ)聞かで待つらむ

爐邊閑談

思ふことといひもてゆけば埋火のあらはれぬしも下にのこらじ

老少送年

つもりてはそれも變らじ身にすぎし昨日の年の人にくれゆく

戀

寄天忍戀

いひいでぬ心を空に照し見ばなかなか世には知られざらまし

寄風聞戀

いひよらむわれに誠のたよりあらば音する風に聞かせそめても

寄雲見戀

何にこの身を浦島にたつ雲の見てはくやしきおもひそふらむ

寄山契戀

聞かずやはときはの山に咲く花のいはでは頼む色もみえじを

寄野占戀

知らぬ野もわが心なる足うらのあはぬ道にはふみもたがへじ

寄海遠戀

藻鹽草あまのすさみのそれさへぞかきおきながら便だになき

寄里待戀

くれごとをこの里人に知られじと心をとるも待つにくるしき

寄垣通戀

榊葉のかげをしるべにとめてこし神のいがきは我れも隔てじ

寄木厭戀

よそへてもうき世の中は厭はなむたえて櫻のわれやなになる

寄草馴戀

いまはさは蓬にまじるあさはかに心ともなきこころをも見む

寄鳥僞戀

春の野にたのめおきつる跡もなし尾花に鳴きしもずの草ぐき

寄獸顯戀

暫しだに蔭とたのみしうつぼ木の物の隈なき世をいかにせむ

寄蟲切戀

見し夢もなにか胡蝶のゆめならむわが思寢のわが身なりけり

寄箏別戀

なほざりに人をぞ思ふことのねに天とぶ雁はゆくかたもなし

寄絲恨戀

いかさまにうつり變らむ白絲のもとみし色はいふかひもなし

雜

澗戸雲鎖

玉かつらたえぬ物ぞとゐる雲にさ(の)も谷せばきす(み)まひをぞ思ふ

村村煙細

山かげやひとりびとりとすむ里はけぶりの末もわかれてぞゆく

寺近聞鐘

おもふにも瓦の色に鐘のこゑ見るやさびしき聞くやかなしき

暮林鳥宿

いかにして(ゐ)鳥の心ぞ世にとほき山ばやしにといそぐゆふべは(え)

蘆隔漁火

吹きしをる風のすゑ葉もいさりたくほかげ短き蘆のむらだち

遠帆連波

ゆくすゑは空とぶ鳥やおきつ舟なみのいくへに雲もたちきて

夕陽映嶋

夕づく日のこらぬ色やあへの嶋鵜のすむ石のうへに見ゆらむ

長河似帶

山とほくおび引きすててゆく雁のおなじつらなるすゑの河波(河水)

旅人渡橋

大江山過ぎしいく野のなぐさめに日をわたるべきあまの橋立

披書逢昔

忍ぶらむ昔の文よなにごとのありきあらずも目(み)のまへにして

往事渺茫

こしかたもかくや見てましとどまらぬ光も陰(の)もひさかたの空

憂喜同夢

いでやそのありのすさみに見し夢もはては歎の陰のかりぶし

逐日述懷

暮れがたき夏のいく日もあたら夜の窓の螢のかげも知らずて

胸消是非

ことわりはひとつ心のねざしかなこのて柏のとにもかくにも

社頭祝世（取言イ）

上下と人にみだれぬ道までもわが世にまもれ賀茂のみづがき

御百首

歳中立春

冬の日のするのまつ山年こえておもへばかへる波のまもなし

六月立秋

夕すずみ風さやかにて水無月のひかりながらに秋やたつらむ

霞遠山衣

山は今朝かすみのころも春やとき花やおそきとにほふ色かな

霧織女帳

ほしあひの夜や明くるまも久方の天の戸ばりは霧にとぢめて

梅香留袖

梅が香はくらぶの山もたどらじを袖にぞ花のやどりとりける

萩音近枕

小夜まくら風吹かでしも萩の葉は音するものかしづかなる空

水郷柳

にごる名もなにかたつ田の河水はみどりにふかき青柳のかげ

故郷萩

秋萩のふる枝ばかりぞふるさとの草木がなかの花にのこらむ

溪蕨

山づととこの頃たれにこころざし深き谷にもわらび折るらむ

砌蘭

いかにして芝の砌のふぢばかまぬしとなる名をわれに殘さむ

春月

ほのかなる月にふけたる春の夜のかねぞ霞のほかにもりくる

秋霧

そことなくうきたつ霧の朝じめり身にしむ物の袖におぼえて

春曙

あけぼのの春とやしたふ人ならぬ霞のそでもきぬぎぬのそら

秋夕

花ならぬ千ぐさにものを思はせて袖にいろこき秋のゆふつゆ

春風

秋のこゑに吹きかへむ程も目のまへの若葉になびく枝の春風

秋雨

散りそめし一葉も日日につもりそふ庭にさびしき雨の音かな

初花

なべて世にまたれてとくる花の紐われならでとは何か思ひし

新月

かたぶくををしむ空かは夕暮の月はゆくゆくひかりそひつつ

花盛

あぢきなく今日のさかりに思ふぞよ花のうへなる露の世の中

明　月

わきて見む月もみちぬるそらをこそきずなき玉の光なりけれ

落　花

花にこし布留の中道ちるまでを見ずばとこれも物おもふらむ

殘　月

のぼる日ははや影たかき空の月雲路やかはるゆくとしもなき

連日苗代

なはしろに春の日數をつむよりぞ稻葉かる手の秋もしらるる

隔夜擣衣

うちたゆむひまもありけり蜑衣ぬる夜は夢のみるめかるらむ

橋邊藤

花もをし谷のいたばしいたづらに苔のみだれてかかる藤なみ

澤畔菊

にほふなり嵯峨野のあきのいろいろも菊ひともとの大澤の池

岸欵冬

川風によりくる波のおのづから折りてやかへる岸のやまぶき

嶺紅葉

嶺たかみ松よりおくの薄紅葉そめつくさぬもふかきいろかな

暮春鶯

うぐひすの涙よいかに雪の中の春はきのふの今日のわかれに

晩秋鹿

この夕しらずはるけき鹿の音は秋をいづくにおくりてか鳴く

首　夏

夏衣たつことやすき今日にあひて昨日の花のかげやこふらむ

初　冬

秋のみか今朝も西こそあらし山はげしきおとの冬をつぐらめ

卯花

卯の花のいろをも梅の匂にてこのしたやみをあやなくやみむ

時雨

世にふるもあるにまかせよ雲につれ風にたぐひて行く時雨哉

蘆橘

つゆけしな花こそ宿の妻とのみながめ侘びぬる軒のたちばな

落葉

木枯やねたましがほに蹈みわくる跡をも見せぬ庭のもみぢ葉

早苗多

今日いくかこのもかのもに植ゑわたす早苗も繁し筑波根の陰

寒草少

したひても秋をやひとりおもひ草尾花がもとの霜がれのころ

嶋夏草

なみの花はありもあらずも夏草の野嶋がさきに秋やまつらむ

江寒蘆

難波江のあしの枯葉やみをつくし朝おく霜のふかきしるしに

月前郭公

いづれをか待てともいはむ時鳥かたぶく月にすぐるひとこゑ

雪朝遠樹

たぐひなき川邊の雪の朝がしはぬる夜をたれか起き出でてみむ

雲間郭公

雲のうへにさだかにきかむ時鳥およばぬ空の鳴く音ならずば

雪中待人

とへかしな雪のしら山とほからず思ひやらるるよもぎふの宿

雨後郭公

時鳥かごとがましくいまぞとふさはらじものの雨をすぐして

雪中興遊

門はなほあくる夜おそしとほくこし宿は伏見の雪のあしたに

五月雨晴

見もなれぬ日影をほゆる犬もあれや五月をくらす雨の晴間は

千鳥曉鳴

なほのこる有明の月をしたふ夜や雲のなみにも千鳥なくらむ

照射

あけやらぬともしの影もしめるらし木の下ふかき宮城野の露

網代

もるわざもさぞな網代の床なかにせむかた波のよるよるの聲

鵜河螢

みだれゆく螢はそらにのぼる瀬の鵜舟のかがり影ぞわかるる

狩場霧

ひととほりみぞれのそらの雲風もさわぐ狩場は鳥やたつらむ

杜蟬

夏の日の森のこずゑはかくれなきいづくの露に蟬のなくらむ

神樂

八たびおく霜夜もふかしここにます神のみまへの榊葉のこゑ

夕立

ゆふだちに風吹きたてて道の邊の塵もさながらくもる空かな

佛名

かずかずにとなふる御名も雲の上三世の佛に三夜をかさねて

曉蚊遣火

よひの間は立ちいでてすずむ里人や曉かけて蚊やりたくらむ

深夜埋火

おもふかひなきになしても深き夜の月をそむけてむかふ埋火

貴賤夏祓

神はその人にかみつ瀬下つ瀬のみそぎも同じなみにうくらむ

都鄙歳暮

かはらめや都のほかの住居にも春のとなりのことしげき世は

寄月戀

夕月の夜をへてまさる影はあれど猶見るたびのなずらへやなき

鐘聲何方

里ありとゆふつけ鳥もなく夜半の鐘をいづくに聞きか定めむ

寄風戀

われを人花さそふ風に厭ふとも散らすばかりの浮名おほすな

松風入琴

松をその知る人にして琴の絲もたたじやおなじ風のしらべに

寄雲戀

かひなしやたなびく雲の立居にも我が中空にこふるばかりぞ

雲浮野水

ひととせやうつる野澤の春のみづ夏の雲ゆくみねもさだかに

寄雨戀

とはぬをば思ひすつとも雨の夜のあくる限をいつとかまたむ

田家暮雨

もりすてていでていなばや稲筵つゆけさまさる雨のゆふべは

寄煙戀

立ちそひて消えむといひし煙こそなほもえまさる思なりけれ

遠村煙細

山かけてすむかげならし夕煙たえだえ見しはくもにのこりて

寄山戀

うち出でていつ一こともいはせ山谷のした水むすぶばかりに

山路旅行

こし方のせめて見ゆやと行く先にあらぬ山路をよぢ上りつつ

寄野戀

憂くつらきをりふしごとの言の葉や夏野の草に繁さまされる

原上旅宿

一夜かるまくらもあまり露けしな小野の篠原しのにみだれて

寄浦戀

こと浦につひによるとやあだ波のわが汀をばとほざかりゆく

湊頭旅泊

すむ月のかげの湊のとまりぶねなほこぎいでむよるの波路を

寄杣戀

いかさまにおもひ入りけむ杣山の山口しるきなげきのみして

山家人稀

すみつかむ程はみ山も尋ね見よ友とする人ひとりふたりは

寄關戀

わりなくも戀路におほき關なれや人目の外になこそともいふ（と思（ぼ）い）

澗戸鳥歸

朝な夕ないづくに出でて歸るらむ鳥のこころのあさき谷かな

寄松戀

涙のみいふかひなくて松の葉のしのびにおつる心をぞおもふ

夜鶴鳴皐

この夜半やふけゆく空に澤水のすめる聲してたづぞ鳴くなる

寄杉戀

今は身にまたもあひみむちぎりかは人のこころの二もとの杉

曉猿叫峽

ましらなく山下水にありあけのかげはそらなる月としらずや

寄竹戀

風の音にひとりぶししてわが宿のいささむら竹人だのめなる

江亭眺望

よせかへる音はうけれどおきつ波みれば入江を宿のいけみづ

寄草戀

うちわびて今はわれもやわすれぐさ人の心をたねとしてまし

草庵結夢

とにかくにみるや夢の間いつまでと草の庵に世をつくすらむ

寄葛戀

まちえてもなに一筆はみづぐきの岡の葛葉のうらみそふらむ

林下幽閑

夕けぶり紅葉をたきし名殘をや木のもとずみになほ殘すらむ

寄玉戀

八重葎つゆのみふかし待つ人にいつか玉しくくれもありけむ

窓灯欲盡

よむふみの言葉のこりて燈火のかげをしばしと慕ふまどかな

寄鏡戀

いかにせし夜のへだてぞ山鳥のはつをのかがみ影もみえぬは

對鏡悲老

いつよりか塵もくもらでます鏡さやけき霜をはらひかぬらむ

寄衣戀

おもへどもかひなきものかうす衣かさねぬ袖にのこる人かは

述懷依人

そらに知れわが世忘れて人の世を思ふばかりはたれ思はまし

寄枕戀

今ぞ思ふ後しのぶ中にしるといふ枕ばかりのかたみやはある

往事催涙

見ても知れなみだに向ふをりふしを言葉にいでぬ昔なりとは

寄筵戀

おもひやれくるる夜ごとの秋風は身に狹筵のねむかたもなき

社頭祝言

波間よりあらはれしあともいちじるき松がねいくよ住吉の宮

以卷物校合了

御著到百首 永正六年

春部

歳中立春 九月九日

年のうちの雪もけなくにあづさ弓おして春たつけふの初かせ

野外朝霞 十日

朝戸出の野守がいほよ世は春のかすみも袖につゆけかるらし

海上晩霞 十一日

浪の上はいりあひの鐘もほどとほし霞むやゆふべかへる釣舟

山居子日 十二日

住む身こそいつともわかね山松の子の日にあふも春の一しほ

水郷若菜 十三日

河上につみてかへらむ若菜にもよる瀬は妹があたりをや(イ)思ふ

春鶯呼客十四日

さそはれむ花のもとをばわすれじを心いられのうぐひすの聲

氷消田地十五日

春の日のみかげよりこそ筑波根のすそわの田井も氷とけけれ

南北梅花十六日

名にしおふ嶺の春風吹きわけて散ればひらくる梅が香ぞする

露暖梅開十七日

露もけさ春のひかりやこもるらむ梅の香(カイ)ならで花ににほへる

春雁離離十八日

慕ふとていづれか春にとまらじをおくるる雁のゆくも悲しき

獨見春月十九日

雲霞われをやねたむ春の夜を思ふがなかと月にあかして

閑中春曙二十日

春の夜の夢をわすれてなにとこの思ひもおかむあけぼのの空

柳無氣力二十一日

見るほどぞしづごころなき花ならぬ柳が枝をかぜにまかせて

旅泊春雨二十二日

春の雨もいかにもりけむなみまくら笘のひまひまあくる光に

行路春草二十三日

時しあれば(イ)青きをふみしいろせし草の上もはては往來の道によくらむ

山寒花遲二十四日

咲き出でむのちは風なき花ならばしばし深山の春さむくとも

花下送日二十五日

花にきて今日をいく日と思ひけむ咲きちる程は時のまにして

落花入簾二十六日

おしあての匂ばかりもこすの内に花とはいはむ花ぞちりくる

桃花曝錦 二十七日

あひおもふ錦ともみる色なれやものいはぬ桃の花のうへをも

留春不駐 二十八日

いかにせむとまらぬ春に殘る身のおくれじとするも見ぬ別にて

夏部

羈旅更衣 二十九日

しをれこし山分衣かへまくも惜しとはいはじ今日を待ちえて

殘花何在 十月一日

なべて咲く春こそあらめ山守もこころゆるさむ花やとはまし

人傳郭公 二日

郭公こゑをつたふる言の葉はよしいつはりのある世なりとも

寐覺郭公 三日

ここにしもぬる夜をしらで時鳥おぞくも夢ののちに聞きつる

廬橘子低 四日

實を結ぶ花たちばなに降る雨もしたてる色をそむるとはなし

民戸早苗 五日

かげしむる門田の早苗植うるより稻葉のいほもみる心地して

杣五月雨 六日

さみだれにひかぬ宮木も杣河のみづのひびきに山びこのこゑ

湖五月雨 七日

海士はいさ海吹く比良の山風にかへるとも見ぬさみだれの空

鵜舟廻嶋 八日

大井河見よや鵜舟にともす火のあかしもさぞと嶋がくれゆく

連峯照射 九日

夜の雲かさなる嶺にかげきえてのこるともしを外山にやみむ
里蚊遣火十日

蚊遣たくおもひつきせぬ山里の夜のけぶりやみねのあさぎり
閑庭瞿麥十一日

はらはねど塵にけがれぬとこなつの花の色のみ惜しき宿かな
沙月忘夏十二日

露しめる眞砂の月のすずしさを秋のいろいろありかずにせむ
野亭螢火十三日

身を知るもはかなき野邊の草の庵にとぶや螢も石の火のかげ
晩夏蟬聲十四日

夏ごろもうすきにおもふ秋風をいそぐもくるし蟬のもろごゑ

秋部

幽栖秋來十五日

知られじの淺茅がおくのおとづれも人ならましの秋のはつ風
二星適逢十六日

織女はさらに今宵ぞにひまくらなに年ごとのちぎりともせむ
織女惜別十七日

いまはとてよそなるみねの横雲におもふもかなし星あひの空
夜深聞萩十八日

萩の葉に吹きたゆむ風のあとまでもつれなき露ぞ袖に夜深き
萩花藏水十九日

枝おほふ花のかがみのかげも見ず散らぬにくもる萩のした水
女郎花露二十日

立ちよるもわが名はたただじ女郎花露をちぎりに靡きそめぬる
風動野花二十一日

花の色も千千に物こそとばかりにわが身ひとつの野邊の秋風

鹿聲何方 二十二日

このごろの野分山風いづれなほ身にしむ鹿のこゑに吹くらむ

秋夕傷心 二十三日

ことわりの浮世なりけり心よりおもへば秋のゆふぐれもなし

遠天旅雁 二十四日

おもふにもいく海山をしのぎこしこころやかたる初雁のこゑ

横峯待月 二十五日

待ちわびぬ麓の雲もかざごしのみねこす月にたちのぼりつつ

明月如晝 二十六日

さやけさを露のひるまと思ふにはなにをかやどり月のした草

十五夜月 二十七日

一葉より月もる桐のした水も最中のかげやさらにすむらむ

雲間稲妻 二十八日

稲妻のひかりもおなじ末たえていづくともなき雲のかけはし

名所擣衣 二十九日

住みこしはあらぬものから深草や里は野風にころもうつなり

霧中求泊 三十日

霧のうちにこぎいる舟のそのままにここを泊と行く方やなき

伴菊延齢 十一月一日

うつろふと見るもさかりの秋の菊老せぬ花に身をやわすれむ

霜草蟲吟 二日

こゑごゑに聞きしも今や松蟲のひとりつれなき霜のしたぐさ

紅葉出墻 三日

ひまをあらみ紅葉はよそのながめにもあるじに惜しき賤の松垣

山路秋過 四日

さを鹿の跡だにみゆる山路にもしられぬ秋のいづちゆくらむ

冬部

初冬落葉 五日

神なびの森はけふこそ冬の色にかねてうつろふ一葉だになき

遠郷時雨 六日

生駒山しぐるる雲をいかにみむ思ふあたりはありもあらずも

寒草處處 七日

冬枯にいづれかいづれわすれ草こはしのぶべき秋のいろかは

濱邊寒蘆 八日

あしの葉に浦風さえて濱ゆふのいくへの霜をむすびそふらむ

月照網代 九日

波風をわすれて袖にやどすともさこそあじろのとこの月かげ

連日鷹狩 十日

たなばたの一夜の宿もいく夜ねむあまの河原のあかぬ狩場に

薄暮千鳥 十一日

夕しほの入江のたづの友千鳥こゑをかはしていまか鳴くらむ

氷留水聲 十二日

こほりては音せぬ水よものごとに絶えぬ流のありと聞くにも

寒閨聞霰 十三日

衣うつ秋のかせにもたへざりし閨はあられの散るにまかせて

水鳥馴舟 十四日

水鳥のつりする舟になれくるも網にもれたる身をや知るらむ

雪中殘雁 十五日

雁やしる越路にのこる春よりもみやこは雪のいまもあさしと

眺望山雪 十六日

そらにのみ雲をつくせる月もいさ雪にはれてぞ山の端もなき
雪埋苔徑十七日

ふりゆくは苦にもみえし道ながらまた今さらの雪のやまざと
爐火似春十八日

あくる夜のかすみの色も埋火のひかりよりみる閨ののどけさ
老人惜歳十九日

つもりては我が身ひとりぞ年のくれ年は春とて立ち歸るとも

戀部

思不言戀二十日

思ひあまりあらぬ人にやなかなかに問はずがたりの心みえまし
祈難會戀二十一日

榊葉の葉かへぬかげを見るもうしつれなき色に祈りこし身は
歎無名戀二十二日

とにかくに立つはなき名ぞ思はぬを思ふ習も身にはしらねば
相互忍戀二十三日

誰がかたに限知られむとばかりにいとど忍ぶの亂れてぞ思ふ
不堪待戀二十四日

萩の上の露をも袖にはらひかねわが待ちくれば風もつれなし
臨期變戀二十五日

頼めしも今の間ながら音せぬはもし忘るやのうたがひもなし
時時驚戀二十六日

あぢきなくこれをまことの契かは忘れぬ程におどろかしても
憑誓言戀二十七日

われにのみいふにもあらず誓ひてし言葉は神のしるに任せむ
深更歸戀二十八日

うらみても夜ぶかき道のいかにぞとそふる心もわれに別れて

後朝切戀 二十九日

またいつといひしぞ命わすれずば今朝の名殘や思ひのどめむ

逐日增戀 十二月一日

ものおもふ雲のはたての夕月夜よをへてまさる影は見ゆらむ

非心離戀 二日

思へかしその人ならぬうつし繪にとほき別もなきためしかは

見形厭戀 三日

鳴く蟲もはてこそかかる姿なれすさめぬ戀のわれやなになる

披書恨戀 四日

藻鹽草わがかきやりし程ばかりかへる波にはみぬもかひなし

絶經年戀 五日

こころにもあらぬ月日ぞ一たびの逢ふにしかへば命ながさは

雜部

殘月越關 六日

越えやらでまづやすらはむ有明の月はこなたのあふさかの山

風破旅夢 七日

草枕とけてねぬ夜はこころともさめまし夢にまかせてぞ吹く

嶺林猿叫 八日

花にかせ香をだにおもふ峰の雲ふかきこずゑに猿も啼くなり

翠松遠家 九日

頼むとて千とせをふべき住居かは松をめぐりの垣もはかなし

山家人稀 十日

かりにだにとはぬやいかに遲れじといひしは變る山路なりとも

野寺僧歸 十一日

かへるらむ袖に夕日のかげ見えて野寺のみちは山もつづかず

田家見鶴十二日

刈りあげし田づらの里のいつまでと(イ)鶴は門もる聲のこすらむ

樵路日暮十三日

やすらはむ花なきころの山人はいかにくらして今かへるらむ

晴後遠水十四日

よそにみる水かげすみて山かせに朝川わたり行くしぐれかな

滄海雲低十五日

へだてこしおもかげみせて浦嶋やあけ行く雲ぞ波にのこれる

漁舟連浪十六日

浪のうへに釣するほどを友舟のおのがうらうらまたや別れむ

江雨鷺飛十七日

降る雨にあし間を出でてとぶ鷺の入江の山もかげはあらじを

夜涙餘袖十八日

ねざめして思ひしことの數數になみだとなりて袖にせけども

憂喜依人十九日

あづさ弓これはうしなふことわりは心をわけむ物としもなし

竹契遐年二十日

すゑずゑの千年のかげも契りおけ御垣の竹は誰れをへだてむ

御百首

文龜三年自桃花節禁裏御着到和歌

春

立春

今日といへば春の月日にめぐりあひて同じ千年の年も珍らし

山霞

こほりとく水しづかなる山風やかすみのしたに聲むせぶらむ

海邊霞

磯山やいはほのこらず越す汐は松よりくもるかすみなりけり

鶯

霜さやぐ竹のねぐらやさむからし窓に夜ぶかきうぐひすの聲

野若菜

影うつす野守の鏡さもあらばあれ年の若菜をけふは摘みてむ

梅風

さそはるる匂は花につれなくてかせをも知らぬ梅の木のもと

柳

あかなくに何をかいはむ朝露のやなぎが枝(の)にほひやはなき

春月

山鳥の尾上はとほくかすみきてそらにへだてぬ月ぞすみゆく

春雨

あくがるる心を人にしづめてやきのふも今日もはるさめの空

歸雁

あまつ雁さこそは花もしら雲の道ゆきぶりぞさらに(かねて)ゆかしき

早蕨

萌えいでて常にわすれぬ早蕨もみやまの春はいふかひもなし

栽花

誰が宿とうつしうゑけむあしがきの吉野の花のいにしへの春

尋花

越えのこす峯の白雲けふもまたよそめばかりの花にくらしつ

盛花

あぢきなく花にさかりの色香をば心をとめて世をやわすれむ

挿頭花

たが袖のにほひくはばる花ならむ老に限れるかざしならねば

落花

散りにけりかばかり人の思をばおよばぬものよ花のこころは

苗代

賤はただせきいるる水を庭にみてなはしろかきや家居なるらし

歎冬

たちばなのむかしの名殘そのままに花にやにほふ井手の山吹

藤

夕日影かすみあひたる木の間よりもれいづる藤の花ぞ色こき

暮春

年ごとにことしは夢にくれにきと思ひなれぬる春としもなし

夏

更衣

たちかふる今日のこよひや唐衣春にかへしてゆめも見るべき

葵

あらぬ名にわすれむものか葵草神まつる世を代代にへだてば

待時鳥

みやこにて鳴けほととぎす山里は人に岩木に待たれやはする

時鳥遍

時鳥こよひあけなばいくこゑといくその人にかたりあはせむ

菖蒲

長きねにさそはれいでて池水のあらぬ水草もひくあやめかな

橘

たちばなの匂も袖につゆけくて花にきのふのむかしをぞ思ふ

五月雨

瀧川はあまたにおちて五月山あめよりほかのみなかみもなし

夏草

花やありとおもひ入るべきみちもなし夏野の草の端山しげ山

夏月

今日の日の端居のままに待ちいでて月も心あひの風ぞ涼しき

蚊遣火

厭ふとていかにふすぶる業ならしさてだにあれな賤が蚊遣火

螢

飛ぶ螢ひま求めくる小簾の中にくらきまぎれの見えてまばゆき

池蓮

水ちかくうづめばまさる一種のにほひもこれか池のはちす葉

夕立

ふりおける五月を雨のかぎりにてくもるばかりの夕立のそら

納涼

苔のうへに落葉うちはらふ夕すずみ霜の後なる松かぜや吹く

六月祓

水底の月まちいづるかへるさはみそぎに思ふことやのこらむ

秋

御百首部類

早秋

秋風を身にしむ色におもひそめてあやしや今日の袖も露けき

七夕

たなばたのなづともつきぬ岩枕かはすもまれの天のはごろも

萩

秋は來ぬ一葉のうへの風よりもこころにもろき萩のおとかな

萩

見るままに色にやいでむ眞萩原花よりおつる露のした葉は

女郎花

たちかくす霧のよそめの女郎花ほのかなりしも花のおもかげ

叢蟲

たのむらむ草のやどりの蟲の音にところもおかでまよふ露霜

初雁

くる雁のかろきつばさをおもふには波の千里も遠しとはせじ

田鹿

なれにけり稲葉(ヨイ)の鹿のおきふしはかりほのとこ(いほイ)の所せきまで

秋夕

われのみのゆふべになして天地もしらずとやいはむ秋の心は

山月

吹きはらふ風のうへにや出でつらむ麓のちりの山の端のつき

橋月

うらかせにくまなき月を見わたせば松をひかりのあまの橋立

浦月

秋の夜の月に千舟もいでぬべし浦かせすめるおほわだのはま

社頭月

秋の霜ここにおきけるひかりをも月にぞ見つるふるの神がき

古寺月

寺ふりて軒のかはらのいろもをし(ネイ)苔よりおつるつゆの月かげ

暁鳴

寐覺して物おもふ數にくらぶればかぎりありける鳴の羽がき

擣衣

思ひやる夜さむの枕よそにてもうたぬ(ネイ)ばかりぞ賤がさごろも

河霧

都にもちかき河原のへだてのみ見えて晴れゆくきりの山もと

菊

つもりては淵もあさしや名にしおふながれを菊の花の上の露

紅葉

野邊の色や深山の秋にうつるらむ紅葉のちぐさうすく濃き頃

九月盡

とはばその露とこたへて別れゆく袖にや消えむ秋のおもかげ

冬

初冬

冬きては野澤にふかき春の水のみどりをみねの松のひともと

時雨

時のまのしぐれにめぐる月も日もかくてぞ過ぎし一とせの空

落葉

木がくれに積りて深き色もをし吹きだに散らせ風のもみぢ葉

霜

冬がれをこころあさくも見ぬ人や色なき野邊の霜のあけぼの

寒蘆

霜がれの末葉にぞおもふ水底に朽ちせぬ蘆のもとのねざしを

冬月

秋かぜの昨日のやどりさだかにて荻のかれ葉にさやぐ月かげ

氷

かち人のあさ川わたる水よりも行くかたなしとこほる頃かな

千鳥

おのがどち聞くにはさぞな友千鳥よその哀はこゑもかはさず

水鳥

池の面は石間にせばき水鳥のたちさわぐほどの影ぞうかべる

網代

かがり火の影にへだててさゆる夜の河風とほくもる網代かな

嶺雪

よそめには雲を隔てて嶺たかみふりおける雪も晴れ曇りする(イ)

庭雪

今朝みれば軒のたるひの雫までこほりてたまる庭のゆきかな

鷹狩

あかずとや猶かりゆかむあづさゆみ末野の日かげ殘る山路を

炭竈

山がつや炭やく嶺のけぶりをもなほわが宿のものと見るらむ

歳暮

物ごとにかくこそありけれ春に今逢ふにわかれの年の名殘は

戀

初戀

おもへども知らぬ戀路よいかさまに心もゆかぬ行方(ゆくすゑ)をかみ(イ)む

忍戀

涙にや思ひまくべき言の葉にもらさじのみのこころづよさも

祈戀

祈りこしいく年波かいたづらに神のいがきも越えむとすらむ

聞戀

人の上をただには聞かぬわれのみぞ語るが中に言の葉もなき

不逢戀

もがみ川月日はただにゆく舟のいなとばかりに變る瀬もなし

契戀

明日しらぬ世のことわりのあぢきなく頼むにつけて添ふ思哉

逢戀

唐衣かへさで見ゆるおもかげはたが夢ならしわが身ならめや

別戀

あかなくにうらみてかへる心より吹きけるものを葛のうら風

後朝戀

むつごとにつきぬ思をかきやるも夢のうちなるけさの玉づさ

遠戀

朝夕に思ふもとほしあふくまの霧のへだてはありもあらずも

馴戀

おきふしを思ふどちにて過す身のさてはてぬべき心ともなし

顯戀

空にみぬ月のくまをば厭はでやたちかくれにし人にしられし

增戀

日にそへてしぐるる色の木の葉さへ千入とみるに限こそあれ

僞戀

おもかげの月やはとはぬ待てといひて來ぬ人しもぞ僞もなき

悔戀

知らざりきはなだの帶の末つひにからき思にうつるこころは

經年戀

つれもなき色をかさねて槇の葉に苔むす山は年ぞへにける

忘戀

よそにても思ひいづやと慰めて身のならはしの憂きちぎりかな

思

ためしあればいふかひなしやわれのみの思に見えむ富士の煙を

片思

おなじ野の尾花は何をおもひぐさ色なき(イ)露もよそにみだれて

恨

ひとたびの情もさすが見し人をうらむるかたに忘れもぞする

雜

曉

しばしなほ西なる月のふかき夜は山の端とほしあかつきの空

名所松

行きてみむ心あるあまのすさびまで思ふもゆかし松がうら島

窓竹

竹くらき窓にぞおもふ誰が宿にふみの名におふ草もおひけむ

山家

おのづから山は岩陰木がくれにめぐりのかきも幾重なるらむ

田家

秋までとおくる門田をいでていなば賤しき身にも心かろしや

羇旅

波の上山路の露にぬれぬれて(オイ)都の空やそでしぼるらむ

述懷

をさめしるわが世いかにと波風のやそじまかけて行く心かな

夢

春秋の花にさながらなれてみむ小蝶のゆめに身をわすれても

釋教

あはれみの佛も人に身をかへておもひの家の世(ニイ)をやくるしむ

祝言

はるかなる天の浮橋たえせじの世のことわり(わざや(イ))やことのはの道

百首和歌

文龜三年九月九日

春

歳暮立春

なほ殘る年のをだまきくり返しながながし春の日數をぞしる

山霞

同じくば大内山のかすみより世におほふ春のいろを見せばや

海霞

霞さへけぶりたてそへ葦のやのなだのしほや(やき(イ))の春ぞひまなき

舊巢鶯

柴の戸のたがうへならしうぐひすも春(の(イ))しる山に殘るすもりは

澤若菜

もえいづる緑をわけて澤邊なる葦の下根に摘む若菜かな

松殘雪

朝日さす雪のしづくやはらふらむあらしの松も春にしぐるる

庭梅

吹きいるる梅の匂におどろけば小簾にうごかぬ庭のはるかぜ

野梅

つげやらむ野邊にまづ咲く梅が香も知らぬ深山の風のたよりに

朝柳

つゆけさもあかぬやなぎの朝寢髪人にもがなや春のおもかげ

故郷春雨

故郷の春のものなる雨の中をくらしはててもいかにあかさむ

春月

空はただくもりなき色を霞にて山の端とほしすめる夜のつき

曉歸雁

おのれなほかへる夢にやさきだちし寐覺にとほき春の雁がね

待花

かざりありて咲くらむ花の心もや思へば人にかごとがましき

尋花

咲き咲かず去年みし花の宿ごとに忘れぬ春を今日もとひつつ

見花

日の影も月のひかりもめがれなき花よりいでて花にいりぬる

折花

山ざくらただひとえだも人ごとの家づとならば惜しき花かな

惜花

一方に散るをだにみむ朝な朝なつゆけき花のいろかはりゆく

里欵冬

花をしも知らずがほにて山吹の身の春ならぬ井出のさとびと

池藤

さをさして知るべくもあらぬ藤なみに舟こぎまよふ春の池水

暮春

さそひてや花にくれゆく春の水はるふく風もときのまにして

夏

里卯花

よそにみぬ月よ雪よと山里のことぐさなれや咲ける卯のはな

挿葵

うつろはむかざしにもあらず葵草ちぎる心の二葉ともなき

杜郭公

ほととぎす杜の雫もむつかし(き)と思はぬかげにいく夜まつらむ

關郭公

ゆききとて五月ばかりのほととぎすみやこにゆるせ逢坂の關

岡郭公

うぐひすの岡邊の家居おのれ猶ともしき聲ぞやまほととぎす

五月雨久

晴るるしも思ふにくるし六月のてる日にちかき五月雨のそら

田邊螢

飛ぶ螢小田のかはづの諸聲になくにもまさるおもひとを知れ

浦夏月

影やどす(かくす)つたのほそ江の波の間に浦がくれ行くみじか夜の月

水邊納涼

波かせを聞くにもあらぬ涼しさの水より出でて水もうごかず

遠夕立

雲風の行く空はやく見るがうちにいく山こえつ夕だちのあめ

秋

早秋朝

河風にこずゑ露けき朝がしは散らぬひと葉のあきぞ身にしむ

七夕夜深

をりしもあれ月はほどなき名殘より星合の空の殘る夜もうし(なし)

野萩

夕日影うつろひそむる色もをし散らずばありとも野邊の秋萩

荻風

風の音を松にとのみや思ひけむ軒端のをぎの秋をわすれて

薄露

秋にあふこころぞ見ゆる絲すすきさながら露を玉の緒にして

夕鹿

妻や憂き山より月のいでてともおもはぬ鹿のゆふぐれのこゑ

初聞雁

この寐ぬるあしたの原のかりがねに心はそめつ秋のはつしほ

草蟲

鳴きいづる蟲の音待ちておのづから夕かげ草の露も見てまし(しか)

河霧

霧の中をいささ小河のみかさにて麓も見えぬ山ぞうかべる

秋田

いく秋をかくてか見つる小山田のかりほに匂ふ花のふる枝は

禁中月

雲のうへや世世の月かげくもらずば空にも見えむわが心かな

社頭月

ますかがみ神のみむろにすむ月やおなじ光をかけて見すらむ

古寺月

このごろの秋もみがてら露霜の野寺のつきにひと夜あかしつ

山家月

ところせき月はすむべき影もなし爪木こりつむ宿はあれども

閑居月

とふのみを月に待ちみて草の戸をさそはれ出でむ心ともなし

隣擣衣

月はなほうつや衣のいろにだにひかりや添へむ夕かげのやど

岸菊

花の上の露とつもらばよる波のかへらぬものか岸のしらぎく

嶺紅葉

散らぬまの紅葉になにをうらみまし嶺のまくずの心あらなむ

谷紅葉

いづくとかしぐれてのぼる雲ならむ谷のこずゑの秋を殘して

九月盡

またこむははるけき秋の一夜にも天の川原のこころをぞ知る

冬

行路時雨

殘る日は今いくほどのかげならし時雨をすぐす宿をいでても

橋落葉

誰れかそのいひしながらに待ちも見む木の葉ふりしく谷の芝橋

寒草霜

老いぬとて駒もすさめず見し色を霜はのこさぬ杜のしたぐさ

湖氷

こほりてもいつうちいでむ藤波のかげなるうみにとほき春風

冬月

いくたびの時雨あられをすごしても名殘くまなき冬の夜の月

湊千鳥

友なしと人をや頼むみなといりの小舟につれて千鳥鳴くなり

朝雪

いかに見むまつたるることのやまずとて今朝初雪のうすき限は

夕雪

さそひきてかへる空なき夕ぐれの雲もそのままこほる雪かな

夜雪

うづみ火の閨へもいらで冬の夜を雪に忘るるあけぼののそら

歳暮

かくこそと人にうき世も限あれやさてしもはてぬ年のくれぬる

戀

寄山戀

行末はいもせといはむ山の名もいざやせきあへぬたぎつ心は

寄嶺戀

人ゆゑにこころをしをる程ばかり嶺のあらしも松にやは吹く

寄杜戀

なげきとも人やは聞かむさばかりに神はことわる杜の言の葉

寄關戀

ひたみちに頼むとならば關守もうちねぬる夜をまづ許さなむ

寄岡戀

かきやるも散らばいかにと水莖の岡の木の葉におもふ秋かぜ

寄野戀

宮城野や風なき花もちる露のはかなやたれを待つことにせむ

寄原戀

わがおもひ安達の原のいつかさて心にこもるほどを知らせむ

寄河戀

一方のおもひになさでみそぎ河など戀せじと身をたのむらむ

寄江戀

忘草おふるもしらず住の江やまつとばかりをなに頼むらむ

寄沼戀

かくれぬのあやめの枕をりにあへばそれも一夜の契やはなき

寄澤戀

なか空の煙よ人にみえざらば富士のなるさはおとに立てても

寄池戀

さもこそはうきぬの池にとる草のかくみの蔭も水籠りにして

寄瀧戀

戀に身も世をへておつる水上は知らずよいつの袖のたきつ瀬

寄橋戀

歎きあかす枕ばかりやうき橋の夢のわたりをかけはなれてし(イ)

寄海戀

人よいかにあまの千尋もみたびまでかはるを見むは淺き心を

寄浦戀

波こゆる音にもつけて松山のまつのうらかぜわれにはげしき

寄濱戀

今はそのたぐひも悲しうど濱のまれにもきてし天の羽ごろも

寄潟戀

波あらき名殘よいかに汐干がたいふかひなくてくだく心を

寄湊戀

波まくら人にそふべき夢もがなさてぞ戀するかけのみなとに

寄島戀

知らじかし蓬が島のまぼろしもわれをぞよそ(ぼイ)の人の行方は(を イ)

雜

曉寐覺

殘る夜を有明の月にまたや見むあとなき夢のまくらかはして

谷松年久

おろかなる谷のこころをたねとして年にかはらぬ松の言の葉

籬竹

かげしげるいささむら竹木にもあらぬ草の籬に定めてぞ見る

路苔

苔のうへに夜の光やおもふらむ松のほかげもしめるやま路に

蘆間鶴

子をおもふ鶴の毛衣あしづつのうすきや(イ)らのうきをやわぶる夜のうらかぜ

羇中送日

ゆくゆくも草木の色にうつりきて知らぬ野山の月日をぞしる

羇中懷都

見し人を思ひあはするうつつもや宇津の山邊の夢にかなしき

旅泊重夜

かぢまくら袖こすなみも心よりほさでいく夜の月を見つらむ

海邊眺望

海ごしのやまもつづかぬ遠嶋のこずゑの夕日いるかげもなし

寄夢懷舊

としどしに見るもやむかし春秋の花もひと時の夢をしたひて

寄老懷舊

よそにみし昔も戀し身のうへにことしは老をかぞへはじめて

寄世懷舊

われのみやその世ばかりの面影もふるきにしたふ百敷のうち

寄情述懷

いかにいはむ(せむ)あはれも知らぬ心には霞をへだて露をはらひて

寄涙述懷

われからの涙よなにを思ふらむ藻にすむ蟲はなみもかけけり

寄身述懷

賤しきもわれに勝りて送る日をなすわざなくば身をいかにせむ

寄榊神祇

神わざや聲のうちにも榊葉のする葉もとつ葉しげりあふまで

寄鏡神祇

身にちかき神のまもりのうれしきは鏡の影の手にもとるまで

寄水釋教

うかみいづる世をばしらずて幾度か水の白波たちかへるらむ

寄灯釋教

ともしびの一夜のかげに百年の闇はあやなきものとなりぬる

祝言

われもなほ仰ぎてぞ見む人ごとの心のみちにをさむべき世を

詠五十首和歌

春十首

今日といへば春にも名にや立田姫かすみにそめぬ山の端もなし

春さむみ袖のみぬれてたまらぬやかたみにくめる水のふか芹

踏分くる跡さだかにてかげろふのおのれと消えぬ雪間をぞみる

うぐひすの聲をもまたじあくがるる春のこころは春ぞ誘はむ

ぬしやたれ追風ながら小簾の中のにほひをゆづる軒の梅が枝

露にほふ春の柳のまゆねかきみだれてあかぬ今朝のまを見む

かすみはてて夜深き空にながめばや月よりほかにあくる光を

松の葉も眞木たつかげも春はみず花の一木のみよし野のやま

あやにくに今をこそ見め惜まれて散るさへ花の色香なりけり

うつろふと今朝みし露の色になほ夕ばえをしき庭のやまぶき

夏五首

夏きては卯の花山の夕づく夜こがくれおほきひかりともなし

ほのかにて聞きしをたどる時鳥いまの初音や去年のふるごゑ

晴間とはいふほどもなき五月雨の雲に見えすく月もめづらし

秋のいろにあはましものを夏草のなかにひらくる初花はをし

下露のすずしさ知らでのこる日のこずゑをたかみ蟬のなく聲

秋十首

夜のまにはおくらむ草の露もなしまだ秋風にあさすずみして

まれにあふ星のちぎりをうき事に思ひそめぬる秋のそらかな

吹くたびの風におきふす荻の葉はおとなしとても哀とやみむ

かたよりに秋とはいはじ萩が花尾花もおなじ野邊にこそみめ
思ふかたと聞く人さぞなさらでしも待ちつけがほの初雁の聲
いろいろの蟲の音きかば秋きての庭をば草にやつしてもみむ
よそよりも月はうへなき姨捨やふもとばかりの影をだにみむ
海原やとどこほりなき浪のうへの月は空ゆくものとしもみず
霜にひびき風にこたへてまぢかきや遠山がつのころもうつ聲
百くさの花咲く野守われのみと紅葉のやまやいひくたすらむ

冬五首

木の葉ちるあらしのあとの山陰は水のひびきぞ奥ふかくなる
こころある寐覺よいかにみやこにも近き川原の千鳥(にイ)なく夜を
たえずゆく心をしりていな鳥のあすかの川はこほる瀬やなき
みだれちる霰にしらむ闇の中やよるのひかりの玉をなすらむ

たが宿も跡つけがたき今朝のまやあらぬ野山の雪をとふらむ

戀十首

はてよいかに人やりならぬ戀路とてたち歸るべき心とはなし
人にうきこころもしらず忍ぶ身の涙をそでにうらみそめぬる
われのみは神なび山の秋のいろかはらじものと思ひかけてき
とはずとも恨はあらじ今よりはたのめぬ暮を待ちてこそみめ
いらへこそさも聞かざらめいひよればうちもみじろぐ氣色だになき
思ひ(イ)出でて後は夢にもまぎれじを唯今のまのうつつともなき
明けやらぬ槇の戸口のいでがてにやすらふ程を月やまつらむ
人ぞなほ心もしらぬ鳥が音になみだくらべてあかぬわかれを
さりともと思ひのどめしうき(ふイ)しの同じさまにてそふ恨かな
今みるもなみだのかかる墨つきはふりぬる筆の跡としもなし

雜十首

神祇

知るしらず住む世はおなじ石清水わが人ならぬ人ももらすな

釋教

胸のうちにすまむもさぞな秋の空月は霧をもへだてざりけり

迷ふ身もなげかじすゑの法の師は傳ふるままの道やなからむ

無常

塵の身ぞゆくへもしらぬ風ふけば下葉にのこる草のうへの露

別

おくれじとしたひし人は留めおきて友なき道を誰れにかこたむ

旅

こころなほくるしきものと波風の今日の舟路におもふ山ごえ

一夜こそよしやいな野のささまくらなほ秋霧に道やまどはむ

祝

おのづから千とせのかげを友鶴のよはひや松をしる人にせむ

物名（だいばむ たかつき）

春ながら雪をや冬とまたいはむしたかつきえて殘るままなる

述懷

うき事を誰れかまさると世をば唯ひとりびとりの上にこそ見め

詠三十首和歌

早春霞

峰の雪のこるやいづこ春きては四方のあらしも空にかすめる

澤春草

うちわたすかげすむ水の澤の邊に蹈むあとをしき露の下ぐさ

曉梅

明けやすき春の夜ながらいくたびの寐覺になして(イ)梅匂ふらむ

花滿山

うきてゆくたぐひにはあらで白雲のこりしく山は花ざかりかも

江上暮春

ゆく春は波路さはらで暮れぬらむあしわけ舟のおなじ入江に

溪卯花

谷ふかみ咲くや卯の花かひもなしただ埋木のおなじたぐひに

野郭公

分けきつる裾野の露のぬれぎぬも誰が爲かきし山ほととぎす

雨後鵜河

うかひぶね五月の雨もはるる夜の星か川邊のかがり火のかげ

月前荻

秋と吹くかせきく軒のした荻は月のくまなるかげとしもなし

夕蟲

しめゆひて聞かましものを淺茅原夕日がくれの蟲のこゑごゑ

海邊鹿

逢ふことの絶えたる峰か明石がた妻とふ鹿のうらみあるこゑ

閑庭薄

くれごとにかごとがましき露やおく宿は尾花が袖にまかせて

名所擣衣

たかまどの野邊のにしきの花の色もうつろふ秋にうつ衣かな

朝寒蘆

波風のこほるみぎはのあしの葉も朝露さやぐおともさむけし

深夜千鳥

聞く人のまたいづくにか友千鳥おなじ寐覺のそらにかよひて

故郷雪

訪ひきては故郷人のこのすまひ斧の柄くたすゆきのうちかな

聞聲戀

さしてその聞きしもあやな瑞垣のひさしきよりの思なりとは

稀戀

さすがまた絶えぬ物故我が中のつらきながらの待たずしもあらず

增戀

おもひのみせく方ぞなき妹背山おちそふ瀧のよどはありとも

怨戀

あぢきなくとすれば恨み言の葉を思ひしこづり慕ひしもせず

被忘戀

われさへに言の葉をだに忘れめやこころは人の秋にあふとも

旅行

するいそぐ旅にしあればから衣はるかに越ゆる山路ともなし

旅宿

かりまくら嵐にさめて都おもふ夢よりのちの夜こそながけれ

旅泊

舟とめていかにあかさむ松の風みぎはのなみもあらき磯邊に

山家松

山にての友とはこれぞ松かせを聞きけむ人のおなじこころに

山家橋

山里のゆききにわたすこの橋もなほ世にかよふ道と見えつつ

山家苔

あはれいかに又しくものも嵐吹く苔のむしろの塵はらひつつ

寄神祇祝

しきしまの道もかしこしこのたびの手向にあける神に任せむ

寄水懐舊

たちかへり水のみなわのうたかたも忍ぶは昔いまやなになる

寄雲述懐

仰ぎ見ば何かむなしき空の雲みてるねがひを世のためにして

詠三十首和歌

明應五年九月十六日庚申
合點姉小路宰相

江上霞

蘆の葉にまだ春風はおとなくてみしま江ふかくかすむ波かな

野殘雪

富士の嶺に積るはさぞな武藏野の雪間は春にかぎりこそあれ

依風知梅

梅が香を風のやどりと思ふにはゆきて恨みむ我が身ともなし

柳靡風

結びとむる露はなくともあかず見む柳が枝のかせのすがたを

春曉月

今鳴くもそら音の鳥か月はなほかすみはてたる空ぞ夜ぶかき

花似雲

まだ咲かぬ花をあしたの雲にみてこれも跡なき夢のうちかな

落花如雪

まがへども花とは見えで散る雪の木の本ばかりつもる庭かな

雲間郭公

村雨の雲のたえまに鳴きいでて月にあらそふほととぎすかな

沼菖蒲

かくれぬの水の心やあやめ草あやめもわかずうもれゆくらむ

晩夏螢

夏ははや暮れはてぬるをおほかたの夜を急ぎてや螢とぶらむ

故郷秋夕

うきことも露けき袖もふるさとは秋にかぎらぬ秋のゆふぐれ

深夜蟲

とこなれて鳴きよる蟲の聲きけば獨あかさぬ夜こそふけぬれ

嶺初雁

かささぎをおのが友とや誘ふらむ峰とびこえて渡るかりがね

行路月

誰が門とさしてはとはず道の邊や月をやどりに行き歸りつつ

旅泊月

波枕うきねならずばとばかりに思ひたゆたふ月を見るかな

秋山田

さをしかのわがゐる山はなかなかに小田もる人を驚かすらむ

杜紅葉

人もその千枝のもみぢ葉薄くこき信太の杜は繪にうつさなむ

千枝は繪師の名にて尤たくみにめづらしく存候へども紅葉の事不審

時雨告冬

見るままに今朝は冬をや誘ふらむ秋もしぐれし雲のかへしに

浦千鳥

友なしと鳴くや千鳥も志賀の浦や遠きみやこのあと慕ふらむ

歳暮深雪

暮れてゆくとし木きるべき道もなし深山の雪に冬ごもりして

寄露戀

心よりあまるおもひの露ならば袖にもいかでつつみはつべき

寄草戀

露けくもながめいだして我が宿の夕かげ草にたれを待つらむ

寄水戀

かねてより淺きこころを汲みしらで今更うしやわすれ井の水

寄舟戀

うき中にいつの月日か待ちも見むもろこし舟は行き歸るとも

寄筵戀

われだにもいぶせき夜半のすが筵つゆけき床はとふ人もなし

山松

嶺たかき松の落葉やおのづからふもとの塵とまたつもるらむ

野篠

風の音もひとむらたかしはるかなる芝生につづく野邊の篠原

草庵

朽ちゆくもあるに任せつ草の庵は結びかへむもやすからむ身に

古寺嵐

霜よりも嶺のあらしをひびきにて鐘さだかなるあかつきの寺

寄天祝

てらす日もくだれる雨もをりをりのねがひみちぬる久方の空

以清書本卷物點添創年號等書之

詠三十首和歌

聖廟御法樂
大永四年十二月

早春霞

いつのまに春のひかりの朝霞ゆきみぞれせしおなじ空かは

澤春草

雪やまたふる草まじる野邊の色澤邊のあしのした根とけても

曉梅

梅が香におどろかされて見し程の夢もくやしき寐覺とぞなる

花滿山

いづくにか槇たつかげもみよし野の吉野は花にあさき山かな

江上暮春

波風のなご江の春のかへるさをしたふ道にぞたづも鳴くなる

溪卯花

おそざくらひとりと見れば卯の花も咲きそふ谷の心かはして

野郭公

ほととぎす秋なく雁にさきだちて涙おとしつ野邊のゆふづゆ

雨後鵜河

鵜飼舟こぎいでけりな大井河木しげきかげに雨はのこりて

月前荻

風わたる軒のした荻おきふしのかげある月は晴れくもりつつ

夕蟲

あはれいかにゆふ霜まよふ秋の日の光にあたる蟲のこゑごゑ

海邊鹿

妻戀のうらみやふかき海ならむつれなくたてる鹿の鳴くには

閑庭薄

宿がらの淋しさのみや秋といはむ尾花が末はとにもかくにも

一村はうゑても友とみし宿に道なきまでのしのすすきかな(イ)

名所擣衣

なには人すむてふ蘆の八重ぶきにかさねぬ衣うちわびぬとや

朝寒蘆

朝な朝な霜にとぢたる蘆の葉のなびくは水にこほりそ(イ)ひつつ

深夜千鳥

まぎれなく聞く空にこそ友千鳥夜もふけゆけば月いでぬべし

故郷雪

思ひわびぬ故郷人の雪のうち訪ひきてのちの見すてがたさを

聞聲戀

聞けばとて遠山彦はか(イ)ひもあらじ我がいふことの答ならずば

稀戀

あぢきなやよその夜がれと思はずば疎くてとふも頼みこそせめ(あれ(イ))

増戀

日にそへて戀の亂ぞはて知らぬ我が玉の緒のたえしものゆゑ

怨戀

思へかし恨をおへるはてはてのやすからぬ身は己がためぞと

被忘戀

同じ世にふるの神杉すぎこしをよしや忘れぬ我れぞつれなき

旅行

友なくてたびには行かむかりそめも逢ふ人あれば別路もうし

旅泊

草まくらむすべばむすぶ露をみて夢をいかにと慕ひわびぬる

旅泊

白波の立田路いかにおほともものみつのとまりも浮寐ながらに

山家松

朝夕のけぶりもたてじ柴の庵まつの葉すきてあるにまかせば(イ)

山家橋

山ふかみ道なきままにうちわたす橋はいく(イ)つの岩木なるらむ

山家苔

かげたかき木草(草木イ)はいはじ山里は苔のしづくもは(を イ)らひえぬまで

寄神祇祝

見るままに筆もとりあへず手向山この言の葉も神のまにまに

寄水懐舊

水もその濁らばといひすめらばと思ふも人の世にぞしたがふ

寄雲述懐

いかにせば月日をおなじ心にて雲のうへより世をてらさまし

雑二十首

暁鶏

鳴く鳥の八聲のかずもつもりゆく老のねざめに誰れか聞くらむ

夜燈

小夜風の窓のすき間に吹きいりてしづかにもみぬ燈火のかげ

嶺松

嶺たかくみどりの空にいづる日もみさをの松の上に見ゆらむ

里竹

かげしげき軒端の竹の夜はながく暮るるは早き里のひとかた

磯巖

みつしほにいはほ殘らずこす浪のしづくやしばし磯傳ふらむ

嶋鶴

をぐろ崎みつの小嶋の夕浪にこゑそふたづもこころあるらし

岡篠

松の葉のたぐひに見えて露霜の岡邊の小ささふゆがれもなし

江葦

風さむみなほ枯れたてる蘆の葉や入江の浪にをれかへるらむ

浦船

朝な朝なおのが浦浦こぎ出でていとまもなみの海人のつり舟

杣山

山にいる道とは見れど世の中のうきにはこりぬ杣木ひくらし

岸苔

河ぎしや苔のみだれてよる波にこと草よりもつゆはかわかじ

山家水

おとたかき瀧だにあるを山里はかけひのみづも軒におちつつ

山家嵐

塵の世のほかなるものを山里のあらしは何をまたはらふらむ

田家雨

暮れやすき秋の日影もおしねほす賤がかりほの又しぐれつつ

旅行

嶺たかくのぼりて見れば故郷もまだ足もとにちかきみちかな

旅宿

いかにして夢はむすばむ草まくら苔のむしろの露ふかき夜に

旅泊

すゑいそぐ舟出にまちし追風もよるは夢路をよぎて吹かなむ

海眺望

波のうへも行末みえてみつ汐のひがたにちかき浦のとほじま

寄社祝

四方八隅をさまる道はへだてなく千千のやしろの神ぞ守らむ

寄日祝

この國のほかにもしるかめぐる日の光に見えてくもりなき代は

十二首

山

立ちならぶ木木のこずゑも茂山のいづれを杉の青葉(しるしイ)ともなし

河

名にしおふいづくはあれどいづみ河みづの心や清くすむらむ

野

見し秋はところせきまで分けきつる花も枯野の跡ぞさびしき

關

おのづから寐られぬものか浪風もまくらになるる須磨の關守

橋

かつらぎの神代もとほくわたしきて今も朽ちせぬ久米の岩橋

山家

世の中はうかりし物と思ふにぞかかる深山もすみよかりける

田家

冬きては山田のかりほかりにだにとはれ(わけみイ)ぬ道ぞ霜にうもるる

海路

漕ぎいでてわれ(ナミイ)はかぎりも浪の上にいづくまでとか急ぐ舟人

別

かへるべき日數をちぎる別路のさていかならむゆくすゑの空

旅

昨日より今日は馴れぬるこころとやさのみうからぬ旅の行末